

Oracle Internet File System for Sun SPARC Solaris

インストレーション・ガイド

リリース 9.0.1

2001 年 11 月

部品番号 : J04718-02

ORACLE®

Oracle Internet File System for Sun SPARC Solaris インストール・ガイド, リリース 9.0.1

部品番号 : J04718-02

原本名 : Oracle Internet File System Installation Guide, Release 9.0.1 for Sun SPARC Solaris

原本部品番号 : A80901-06

原本著者 : Francine Hyman

原本協力者 : Sudhanshu Garg, Scott Harrison, Mei Hong, Vasant Kumar, David Pitfield, Hanne Rasmussen, Luis Saenz, and David Tom.

Copyright © 1999, 2001, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム (ソフトウェアおよびドキュメントを含む) の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記載された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、Oracle Corporation (米国オラクル) または日本オラクル株式会社 (日本オラクル) を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation (米国オラクル) およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

はじめに	v
対象読者	v
構成	v
関連マニュアル	vi
表記規則	vii
1 概要	
Oracle 9iFS ドメイン	1-1
サービスとサーバー	1-3
ロケータ	1-4
保護ノードと非保護ノード	1-4
HTTP ノード	1-5
ノード構成	1-5
Oracle 9iFS 管理ツール	1-9
Oracle Enterprise Manager コンソール	1-10
Oracle 9iFS Manager	1-11
Oracle 9iFS Configuration Assistant	1-12
Web インタフェース	1-13
コマンドライン・ユーティリティ	1-14
XML 構成ファイル	1-15
管理スクリプト	1-15
2 インストール前の処理	
インストールの概要	2-1
ハードウェア要件	2-2
インストール前の作業	2-3
作業 1: 使用可能なハード・ディスク領域の確認	2-3

作業 2: 既存のデータベースおよびログ・ファイルのバックアップ	2-3
作業 3: Oracle9i データベースのインストール	2-4
作業 4: データベース・マシンの構成	2-7
作業 5: データベース・パラメータの設定	2-7
作業 6: Oracle 9iFS のインストールに必要なプロセスの起動	2-8
作業 7: Oracle Enterprise Manager の設定	2-9

3 Oracle 9iFS ソフトウェアのインストール

Oracle Universal Installer の実行	3-1
Configuration Assistant の実行	3-2

4 インストール後の処理

Configuration Assistant によって設定された事項の有効化	4-1
Oracle 9iFS メール・サーバーの起動	4-1
Intelligent Agent の再起動	4-2
ホストの再検出	4-2
Oracle HTTP Server powered by Apache の再起動	4-2
ifsomssetup の実行	4-2
Oracle Enterprise Manager コンソールからの Oracle 9iFS ドメインおよびノードの起動 / 停止	4-3
Oracle Management Server の起動	4-3
Oracle 9iFS ドメインおよびノードの起動	4-3
Oracle 9iFS ドメインおよびノードの停止	4-3
コマンドラインからの Oracle 9iFS ドメインおよびノードの起動 / 停止	4-4
コマンドラインからのドメインおよびノードの起動	4-4
コマンドラインからの Oracle 9iFS ドメインの停止	4-4
Oracle HTTP Server での Oracle 9iFS サブレットの実行	4-4
別の Jserv プロセスでの Oracle 9iFS サブレットの実行	4-5
デフォルトの Jserv プロセスでの実行	4-5
Oracle 9iFS Portlet のインストール	4-6
Oracle 9iFS Portlet の Oracle Portal への登録	4-6
ポートレット・プロバイダが実行中であることの検証	4-7
デフォルトのパラメータの編集	4-7
NFS サーバーの構成	4-8
NFS のユーザー認証	4-9
NFS の Oracle 9iFS ユーザーの構成	4-9

セキュリティに関する考慮点	4-10
NLS のサポート	4-10
Hummingbird NFS Maestro Client のサポート	4-11
制限事項	4-12
JRE 1.3.0 の構成と使用	4-13

5 クライアント・パッケージのインストール

Oracle 9iFS Windows ユーティリティのインストール	5-1
HTTP を介した Oracle 9iFS へのアクセス	5-3
Oracle 9iFS Portlet の Oracle Portal への登録	5-3
Oracle 9iFS FileSync ユーティリティのインストール	5-5
コマンドライン・クライアント・ユーティリティのインストール	5-5
NFS クライアントの構成	5-6
Solaris 7 または 8	5-7
Red Hat Linux 6.2	5-7
Hummingbird NFS Maestro 7.0	5-9
NFS Maestro Network Access Tool を使用した NFS ディレクトリへのリンク	5-11
コマンドラインを使用した NFS ディレクトリへのリンク	5-13
トラブルシューティング	5-14

6 トラブルシューティング

インストール時の問題のトラブルシューティング	6-1
クラスパスの障害	6-1
インストール時の一般的なエラー	6-2
Oracle Enterprise Manager の問題のトラブルシューティング	6-4
オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問合せ	6-5

索引

はじめに

このマニュアルでは、Sun SPARC Solaris システムに Oracle Internet File System (Oracle 9iFS) をインストールする方法を説明します。次の項目について説明します。

- [対象読者](#)
- [構成](#)
- [関連マニュアル](#)
- [表記規則](#)

対象読者

このマニュアルに記載されている構成およびインストールの説明は、Solaris システムへの Oracle 製品のインストールを行う管理者またはその他のユーザーを対象にしています。一部のコマンドについての説明は記載されていますが、このマニュアルの目的は Oracle 製品または Solaris の管理方法を説明することではありません。このマニュアルは、Oracle 製品および Solaris システムのインストールおよび管理に関する基本的な事項を読者が理解していることを前提にしています。

構成

このマニュアルは、次の各章で構成されています。

第 1 章「概要」

第 1 章では、Oracle 9iFS ドメイン、Oracle Enterprise Manager の統合および Oracle 9iFS の管理など、管理上の基本概念について説明します。

第 2 章「インストール前の処理」

第 2 章では、2 層構造と 3 層構造の比較および Oracle9i データベースをインストールする手順について説明します。

第3章「Oracle 9iFS ソフトウェアのインストール」

第3章では、Oracle 9iFS をインストールおよび構成する手順について説明します。

第4章「インストール後の処理」

第4章では、Oracle 9iFS サーバーの起動と停止、Oracle Text の設定、索引付け機能の起動およびパフォーマンスのチューニングに関するその他の問題について説明します。NFS (Network File System) サーバーのインストールおよび構成についての説明も記載されています。NFS プロトコルは、ネットワーク上のクライアント・マシンとサーバー・マシン間でファイルを共有するために使用されます。NFS は、UNIX プラットフォームでファイルを共有するための標準プロトコルとして広く使用されています。ただし、オペレーティング・システムに依存しないため、Microsoft Windows などの他のプラットフォームでも実装できます。

第5章「クライアント・パッケージのインストールおよび構成」

第5章では、Microsoft Windows オペレーティング・システムを使用しているコンピュータにエンド・ユーザーが Oracle 9iFS Windows ユーティリティをインストールする際に従うべき手順を説明します。このユーティリティは、Windows エクスプローラのファイル・システムではできなかったコンテンツ管理機能を提供します。また、Oracle 9iFS とラップトップ・マシンなどのローカル・コンピュータとの間でファイルの共有および同期を行うための Oracle 9iFS FileSync ユーティリティを設定する方法もここで説明します。

第6章「トラブルシューティング」

第6章には、インストール時に発生する問題に対処するためのテクニックとヒントが記載されています。

関連マニュアル

詳細は、Oracle Internet File System および Oracle9i データベースのマニュアル・セットに収められている次の各マニュアルを参照してください。マニュアルは、PDF 形式で入手可能です。

- 『Oracle Internet File System リリース・ノート』： Oracle 9iFS のこのリリースに固有の情報が記載されています。
- 『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』： Oracle 9iFS の構成および管理に関する情報が記載されています。
- 『Oracle Internet File System 開発者リファレンス』： Oracle 9iFS Java API に関する説明および Oracle 9iFS を使用してカスタム・アプリケーションを作成する方法が記載されています。
- 『Oracle Text リファレンス』： データベースに完全に統合されたテキスト検索ツールである Oracle Text の構成および使用に関する情報が記載されています。

- 『Oracle9i データベース管理者ガイド』： データベースの管理およびチューニングに関する情報、表領域のサイズ指定に関する情報、およびリモート・データベースの構成に関する情報が記載されています。
- 『Oracle9i ユーザー管理バックアップおよびリカバリ・ガイド』： Oracle9i データベースのバックアップに関する情報が記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』： Oracle Enterprise Manager コンソールを使用して Oracle9i データベースを管理するための情報が記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』： Oracle Enterprise Manager の設定に関する情報が記載されています。
- 『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』： Oracle のクライアントおよびサーバーに接続する Oracle Net Services の構成に関する情報が記載されています。
- 『Oracle9i グローバリゼーション・サポート・ガイド』： Oracle のグローバリゼーション・サポートの概要が記載されています。

表記規則

このマニュアルで使用される表記規則は、次のとおりです。

規則	説明
イタリック体	イタリック体は、入力が必要な値を示します。たとえば、コマンドで <i>filename</i> を入力するように要求された場合は、ファイルの実際の名前を入力する必要があります。
固定幅フォント	固定幅フォントは、コマンド、スクリプト名、ディレクトリ名、パス名およびファイル名を示します（たとえば、 <code>root.sh</code> スクリプト）。
大文字	大文字は、パラメータまたは環境変数を示します（たとえば、 <code>ORACLE_HOME</code> ）。
.	コード例における垂直の省略記号は、その例に直接関係のない情報が省略されていることを示します。
...	コマンド構文における水平の省略記号は、前のパラメータの繰返しを示します。次のコマンド例は、複数の <code>input_file</code> がコマンドラインに指定される可能性があることを示しています。 <code>command [input_file ...]</code>
<>	コマンド構文における山カッコは、ユーザーが指定する必要がある変数を示します。山カッコを入力する必要はありません。次のコマンド例は、ユーザーが変数 <code>input_file</code> の値を入力する必要があることを示しています。 <code>command <input_file></code>

規則	説明
[]	<p>コマンド構文における大カッコは、任意に選択できるオプション句を囲んでいます。大カッコを入力する必要はありません。次のコマンド例は、変数 <code>output_file</code> がオプションであることを示しています。</p> <pre>command <input_file> [output_file]</pre>
{}	<p>コマンド構文における中カッコは、縦線（ ）で区切られた、2つ以上の項目で構成される選択項目を囲んでいます。中カッコを入力する必要はありません。次のコマンド例は、選択項目が <code>a</code> または <code>b</code> のいずれかであることを示しています。</p> <pre>command {a b}</pre>
\$	\$ 記号は、Solaris のシェル・プロンプトを表します。 ¹

¹ 実際の例では、特に注記されていないかぎり、各行端で改行されています。ユーザーは入力行の最後で、[Enter] キーを押す必要があります。

Oracle Internet File System (Oracle 9iFS) をインストール、構成および管理するために、管理者は次のような管理上の基本概念を理解しておく必要があります。

- Oracle 9iFS ドメイン
- Oracle 9iFS 管理ツール

Oracle 9iFS ドメイン

Oracle Internet File System (Oracle 9iFS) の管理上の基本的な単位はドメインです。ドメインは、単一の Oracle 9iFS インスタンスです。Oracle 9iFS ドメインは、ノードなど、単一のコンピュータ上で実行されているか、または相互接続された複数のコンピュータ上に配置されている複数の要素によって構成されます。

Oracle 9iFS ドメインの主な要素は次のとおりです。

- Oracle 9iFS リポジトリ。Oracle 9iFS によって管理されるすべてのデータは、Oracle 9iFS リポジトリと呼ばれる Oracle9i データベース・スキーマに格納されます。Oracle 9iFS のインストール時に、リポジトリのデータベース・インスタンスおよびスキーマ名を指定します。
- 1つ以上のノード。Oracle 9iFS ソフトウェアは、ノードと呼ばれるプロセスのセットとして実行されます。各ノードは特定のコンピュータ、つまりホスト上で実行されます。ドメインのノードは、複数のホスト間で分割することもできますし、単一のホストが1つ以上の Oracle 9iFS ノードを持つこともできます。ノードは、Oracle 9iFS リポジトリと同じマシンで実行することもできます。各ノードは、Oracle 9iFS ドメイン内で一意の名前を持ちます。
- 単一のドメイン・コントローラ。ドメイン・コントローラでは、ドメインを構成するノードを管理します。たとえば、ドメイン・コントローラで、実行中のノードの制御お

よびノードのステータスの追跡を行ったり、ノードを監視および管理することが可能です。

Oracle 9iFS ドメインの論理要素は、リポジトリ、ノードおよびドメイン・コントローラから構成されます。ただし、ドメインの物理構成は、ドメインの論理構成とはまったく異なります。ドメインのある要素は他の要素と同じホストに置かなければならなかったり、他の要素とは別のホストに置かなければならないといった要件はありません。小規模なインストールでは、リポジトリ、ノードおよびドメイン・コントローラのすべてを単一のホストに置くことがあります（[図 1-1 「単純な Oracle 9iFS ドメイン」](#)を参照）。大規模なインストールの場合、各要素に別々のホストを使用することも可能です（[図 1-2 「複雑な Oracle 9iFS ドメイン」](#)を参照。図 1-1 および 1-2 で、点線はホストの境界を表します）。

予定された使用方法および予想される負荷に基づいて Oracle 9iFS ドメインの論理構成および物理構成を決定する作業は、インストール前の処理の手順で行います。ドメインの論理構成および物理構成は、要件の変化に応じて変更できます。

図 1-1 単純な Oracle 9iFS ドメイン

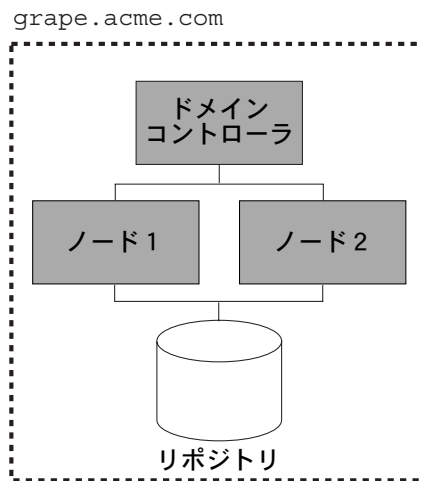
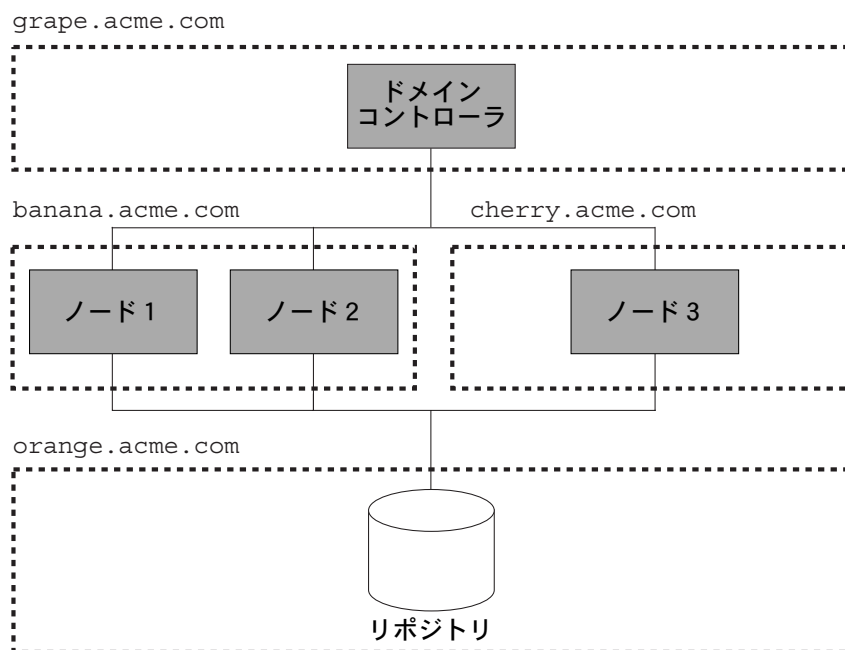


図 1-2 複雑な Oracle 9iFS ドメイン



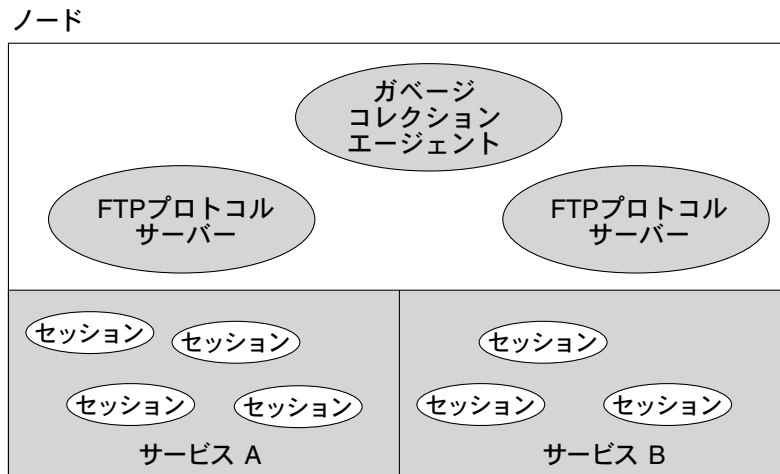
サービスとサーバー

各 Oracle 9iFS ノードは、1 つ以上のサービスおよび 1 つ以上のサーバーを持つことができます (図 1-3 「サービスとサーバー」を参照)。

- サービス。サービスは、ノード上のユーザー・セッションを管理し、これらのセッションがリポジトリのデータにアクセスできるようにします。通常、各ノードでは単一のサービスが実行されます。ただし、キャッシュのサイズ指定やデフォルト言語などが異なる構成のサービスを提供するなどの目的で、1 つのノードで複数のサービスを実行できます。この場合、同じノード上の各サービス (一般的には同じドメイン内の各サービス) は、同一のリポジトリにバインドする必要があります。サービスは、ノード内で一意の名前を持ちます (ドメイン内で一意である必要はありません)。
- サーバー。サーバーは、ノード上で実行されるアプリケーションです。サーバーは、ノードのプロセス内部で、ノードのサービスに対して実行されます。サーバーは、プロトコル・サーバーまたはエージェントのいずれかになります。プロトコル・サーバーは、TCP/IP サーバー・ソケットを開いて、クライアントからの接続を待ち、クライアントの要求に応じてプロトコルの仕様に沿った操作を行います。Oracle 9iFS FTP サーバーは、プロトコル・サーバーの一例です。エージェントは、定期的に、または他のサーバーが非同期に実行したリポジトリ操作に対応して、事前に定義された操作を自動

的に実行します。Oracle 9iFS ガベージ・コレクション・エージェントは、エージェントの一例です。サービスと同様、サーバーはノード内で一意の名前を持ちます（ドメイン内で一意である必要はありません）。

図 1-3 サービスとサーバー



ロケータ

ドメイン・コントローラとノードは、ロケータによって識別されます。ロケータは、ドメイン・コントローラまたはノードを実行しているホストおよびそのポート番号を指定する URL です。

たとえば、[図 1-2 「複雑な Oracle 9iFS ドメイン」](#) では、ドメイン・コントローラのロケータは次のようになります。

```
ifs_socket://grape.acme.com:53140
```

保護ノードと非保護ノード

各ノードには、ノードの監視、エラー条件の検出およびエラーからのリカバリの試行を行うノード・ガーディアンがあります。非保護ノードの場合、ガーディアンはノードのプロセス内で実行されます。一方、保護ノードの場合、ノード・ガーディアンは別のプロセスで実行されます。ガーディアンは、必要に応じてノードのプロセスを終了および再起動するため、保護ノードを使用した場合、より良い障害リカバリが可能です。

デフォルトでは、ノードは保護されています。

HTTP ノード

Oracle 9iFS では、Oracle HTTP Server powered by Apache で実行される Java サブレットを使用することにより、HTTP および WebDAV プロトコルをサポートしています。このサブレットは、デフォルトでは Oracle HTTP Server powered by Apache の起動時にロードされます。ロードされると、このサブレットによってサブレットの Java VM にノード (HTTP ノード) が作成されます。HTTP ノードには、ユーザー・セッションを管理し、ドメインのリポジトリにアクセスできるようにする Oracle 9iFS サービス、および HTTP と WebDAV プロトコルをサポートするための Oracle 9iFS サーバーがあります。

HTTP ノードのプロセスは Oracle HTTP Server powered by Apache によって所有されるため、HTTP ノードは常に非保護になります。

ノード構成

ドメインのノード構成は、Oracle 9iFS リポジトリにオブジェクトとして格納されます。この情報を管理するために、次の 3 つのタイプのオブジェクトを使用します。

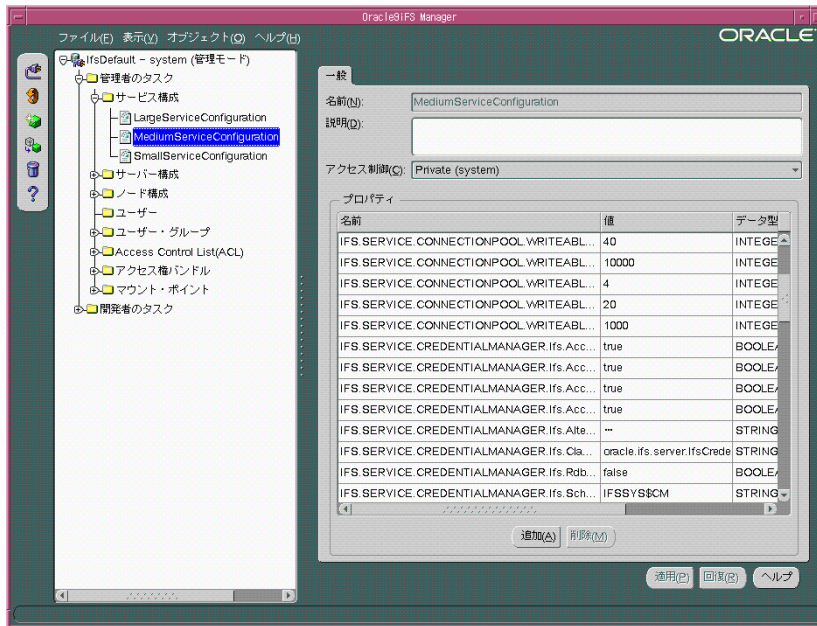
- サービス構成
- サーバー構成
- ノード構成

サービス構成

サービス構成は、汎用ノードにサービスを作成するためのテンプレートです。各サービス構成で、リポジトリのデータベース・インスタンスおよびスキーマ名、キャッシュおよびデータベース接続プールのサイズ、セッションの最大数、サービスのデフォルト言語およびキャラクタ・セットなどのプロパティ値を指定します (すべてのサービス構成パラメータのリストは、『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』の「付録 B」を参照)。サービス構成には、ドメイン内で一意の名前が付けられます。

Oracle 9iFS がインストールされると、小規模、中規模および大規模の各サービスに対応する 3 つのサービス構成が自動的に作成されます。これら 3 つのサービス構成を編集することも、新しいサービス構成を作成することもできます (図 1-4 「中規模サービス構成のパラメータ」を参照)。

図 1-4 中規模サービス構成のパラメータ

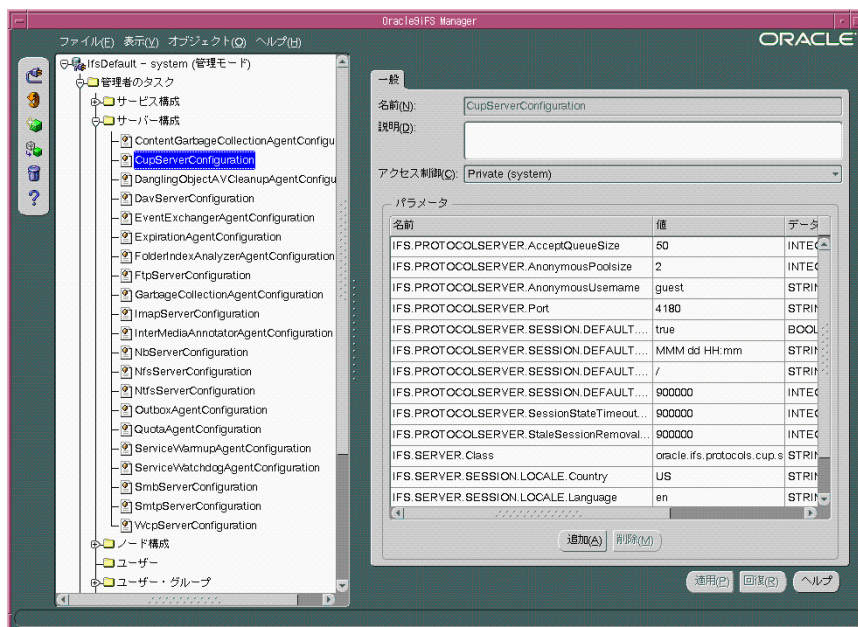


サーバー構成

サーバー構成は、汎用ノードに特定のタイプのサーバーを作成するためのテンプレートです。サーバー構成では、そのサーバー・タイプを Java クラス名として指定します。各サーバー構成では、サーバー・タイプに加え、そのタイプに関連するパラメータの値を指定します。たとえば、Oracle 9iFS FTP サーバーのサーバー構成では、FTP ポート番号、anonymous FTP 接続を許可するかどうか、および接続タイムアウトの時間を指定します。

Oracle 9iFS がインストールされると、各プロトコル・サーバーおよびエージェント用のサーバー構成が自動的に作成されます。サーバー構成には、ドメイン内で一意の名前が付けられます。図 1-5 「サーバー構成 CupServerConfiguration のパラメータ」に、コマンドライン・ユーティリティのデフォルトの構成パラメータを示します。

図 1-5 サーバー構成 CupServerConfiguration のパラメータ



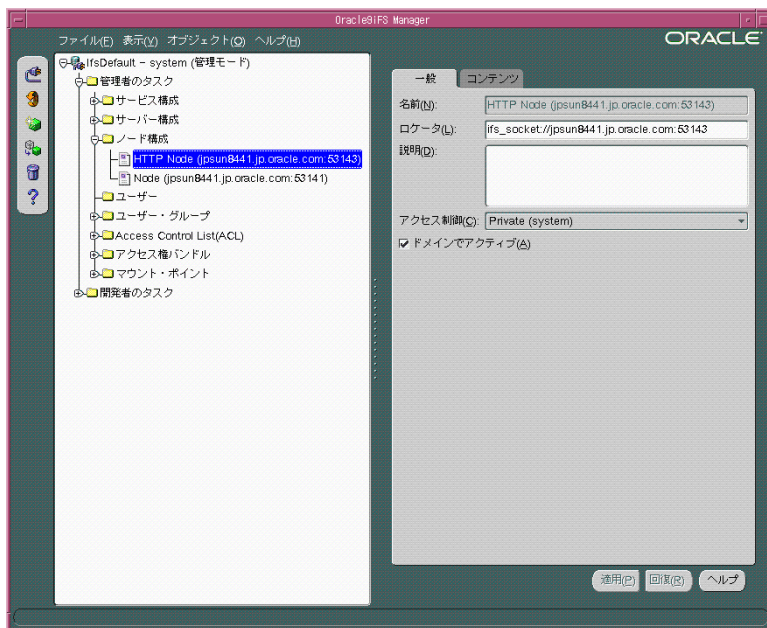
ノード構成

ノード構成は、特定のノードの動作または Oracle 9iFS のインスタンスを定義します。アクティブなノード構成のセットによって、ドメインのノードが決定されます。ドメイン・コントローラは、このセットに含まれるノードについてのみ、ドメインのリポジトリへのアクセスを許可します。

「一般」プロパティ・シート（図 1-6 「Oracle 9iFS のノード構成」を参照）には、次の情報が表示されます。

- ノード名
- ノードのロケータ
- ノードが現在アクティブであるかどうか

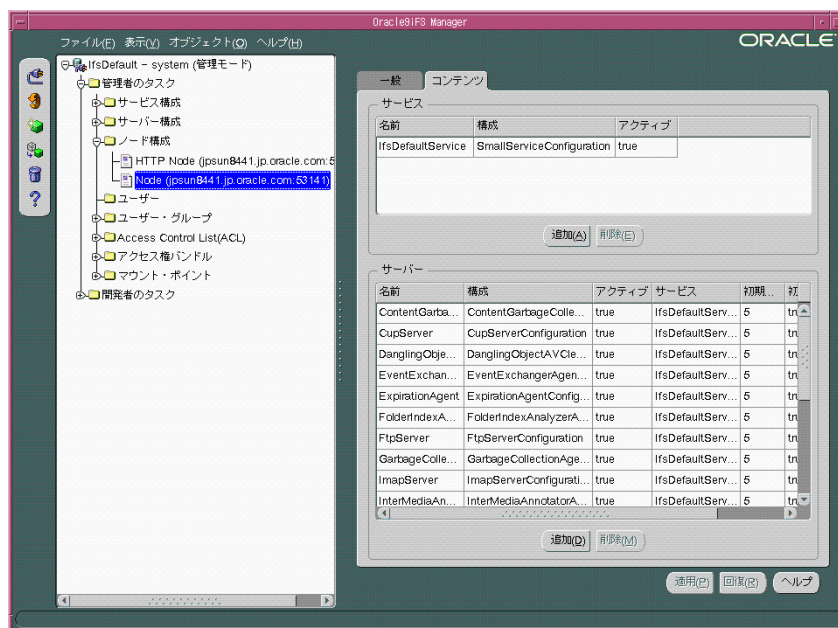
図 1-6 Oracle 9iFS のノード構成



「コンテンツ」プロパティ・シート（図 1-7 「ノード構成のサービスおよびサーバー」を参照）には、ノードのサービスおよびサーバーに関する次のような情報が表示されます。

- ノードのデフォルトのサービス。各サービスについて、ノード構成には次の事項が記録されます。
 - サービス名
 - サービスの構成プロパティを指定するサービス構成オブジェクト
 - サービスが現在アクティブであるかどうか（アクティブでないサービスは、ノードによって自動的に起動されません。）

図 1-7 ノード構成のサービスおよびサーバー



- ノードのデフォルトのサーバー。各サーバーについて、ノード構成には次の事項が記録されます。
 - サーバー名
 - サーバーの構成パラメータを指定するサーバー構成オブジェクト
 - サーバーが現在アクティブであるかどうか
(アクティブでないサーバーは、ノードによって自動的にロードされません。)
 - サーバーが操作を行う際に使用するサービス名
 - サーバーの優先順位
 - ロードした後に、サーバーを自動的に起動するかどうか

Oracle 9iFS 管理ツール

Oracle 9iFS には、管理ツール群が提供されています。これらを使用して、リポジトリの管理、Oracle 9iFS ドメインおよびノードの起動と停止、Oracle 9iFS ドメイン内のノードの構成、ユーザーおよびドキュメント・セキュリティの管理、コマンドラインからの作業、

Oracle 9iFS スキーマ間でのデータやユーザーのインポートおよびエクスポートを行うことができます。

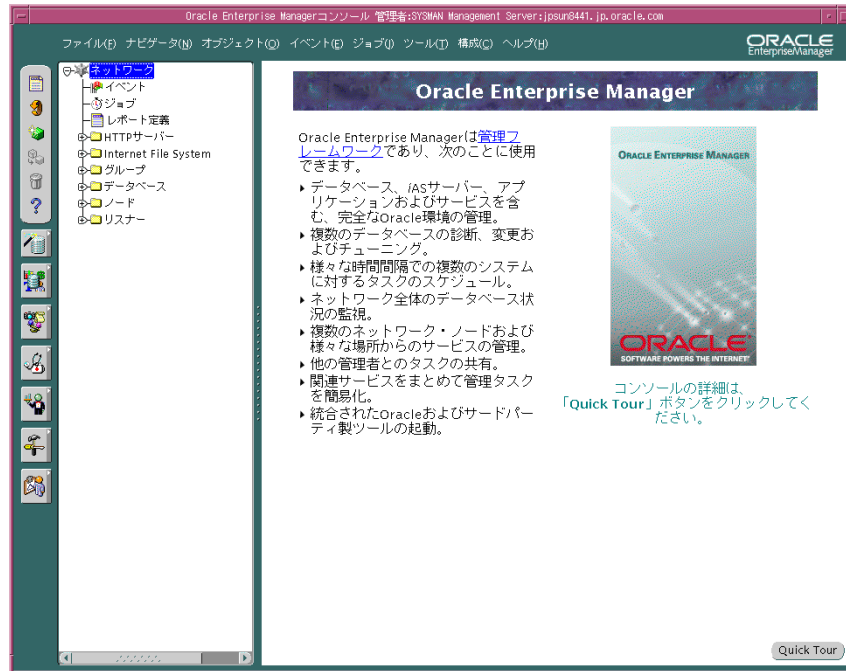
- [Oracle Enterprise Manager コンソール](#)
- [Oracle 9iFS Manager](#)
- [Oracle 9iFS Configuration Assistant](#)
- [Web インタフェース](#)
- [コマンドライン・ユーティリティ](#)
- [XML 構成ファイル](#)
- [管理スクリプト](#)

Oracle Enterprise Manager コンソール

Oracle 9iFS は、エンタープライズ・システムの管理を円滑に行うために、Oracle Enterprise Manager と緊密に統合されています。

- Oracle Enterprise Manager コンソールは、Oracle 9iFS ドメインの監視および管理に使用されます。[図 1-8 「Oracle 9iFS と Oracle Enterprise Manager コンソールの統合」](#) に示すように、「Internet File System」が、コンソールを介してアクセスするメイン・フォルダの 1 つになっています。

図 1-8 Oracle 9iFS と Oracle Enterprise Manager コンソールの統合



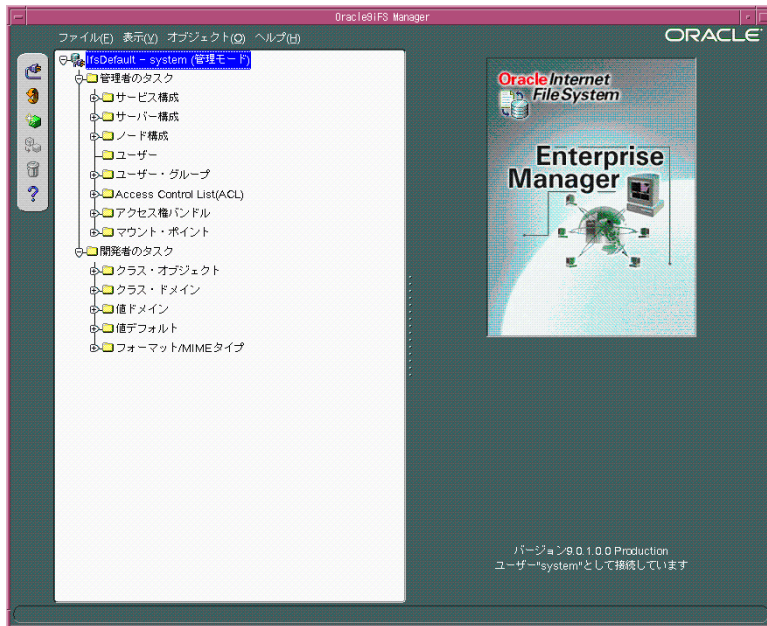
- Oracle Intelligent Agent (IA) は、Oracle 9iFS サービスを検出するために使用されます。また、IA は、ノードおよびドメインを起動するために Oracle 9iFS によって作成されるジョブの制御も行います。Intelligent Agent および Oracle Management Server の起動方法は、第 4 章「インストール後の処理」の「Intelligent Agent の再起動」および「Oracle Management Server の起動」で説明しています。
- Oracle Enterprise Manager イベントによって、障害が発生したドメイン・コントローラ・プロセスおよびノード・プロセスが検出され、電子メールの送信またはこれらのプロセスの自動的な再起動を行うジョブを Oracle Enterprise Manager から起動することもできます。(ノード・ガーディアンによって実行される障害検出とは別に実行されます。) イベントおよび修正ジョブの管理の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle 9iFS Manager

Oracle 9iFS Manager は、Oracle 9iFS の管理インタフェースです。Oracle 9iFS Manager は Oracle Enterprise Manager と統合されており、Oracle Management Server (OMS) との接続モードまたはスタンドアロン・モードで起動できます。

Oracle 9iFS Manager は強力かつ使いやすいグラフィカルなインタフェースを提供し、その機能は管理タスクと開発タスクに分類されています (図 1-9 「Oracle 9iFS Manager」を参照)。

図 1-9 Oracle 9iFS Manager



Oracle 9iFS Configuration Assistant

Oracle 9iFS Configuration Assistant は、Oracle 9iFS の構成パラメータを指定するためのウィザードであり、インストール時に Oracle Universal Installer によって自動的に起動されます。インストールの詳細は、第 3 章「Oracle 9iFS ソフトウェアのインストール」の「Configuration Assistant の実行」を参照してください。パラメータの変更の詳細は、『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』の第 4 章「サービス構成およびサーバー構成」を参照してください。

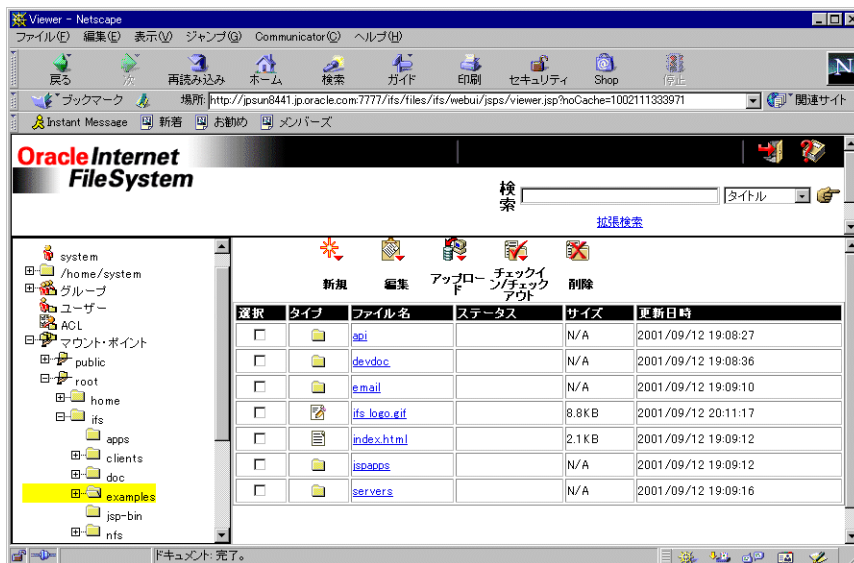
図 1-10 Oracle 9iFS Configuration Assistant



Web インタフェース

Web インタフェース (図 1-11 「Web インタフェース」を参照) が提供する管理機能は、ユーザーおよびグループを 1 つずつ作成する作業に最適なツールです。Web インタフェースでこれらの機能を使用するには、管理者権限が必要です。詳細は、Web インタフェースの「ヘルプ」アイコンをクリックし、ヘルプを参照してください。

図 1-11 Web インタフェース



コマンドライン・ユーティリティ

コマンドライン・ユーティリティは、コマンドラインの使用に精通している管理者向けのインタフェースです。これらのコマンドが最も多く使用されるのは、リポジトリ内の Oracle 9iFS オブジェクトを参照する場合やスクリプトで定義されたタスクを実行する場合です。次に例を示します。

ifsput

指定されたローカル・ファイルを Oracle Internet File System に格納します。<iFSfile> が指定されていない場合、ファイルは Oracle Internet File System のカレント・ディレクトリに格納されます。<iFSfile> がすでに存在している場合、ファイルはバージョンングの規則に基づいて更新されます。

構文:

```
ifsput <localfile> [<iFSfile>]
```

例:

```
ifsput sample.html
```

ローカル・ファイルを、sample.html として Oracle Internet File System のカレント・ディレクトリに格納します。

```
ifsput sample.html sample2.html
```

バージョンングの規則に従い、sample2.html をローカル・ファイル sample.html に更新します。

コマンドライン・ユーティリティの使用の詳細は、『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』の付録 A 「コマンドライン・ユーティリティ・リファレンス」を参照してください。

XML 構成ファイル

XML 構成ファイルを使用して、大量のリポジトリ・オブジェクトを作成する作業を効率化できます。たとえば、次のファイルで Oracle 9iFS ユーザーを作成できます。

```
<SimpleUser>
  <UserName>gking</UserName>
  <Password>ifsc</Password>
  <DistinguishedNameSuffix>.yourcompany.com</DistinguishedNameSuffix>
  <DirectoryUserDescription>Gary King</DirectoryUserDescription>
  <AdminEnabled>>true</AdminEnabled>
  <HomeFolderRoot>/home</HomeFolderRoot>
  <EmailAddressSuffix>@yourcompany.com</EmailAddressSuffix>
</SimpleUser>
```

XML 構成ファイルを使用すると、単一のファイルで複数のオブジェクトを構成できます。ただし、ファイルの 1 セクションに問題があると、ファイル内のそれ以降のセクションは実行されません。Oracle 9iFS での XML ファイルの使用の詳細は、『Oracle Internet File System 開発者リファレンス』を参照してください。

管理スクリプト

コマンドラインで実行するスクリプト群も、Oracle 9iFS の管理に使用できます。これらのスクリプトは、Oracle Enterprise Manager コンソールおよび Oracle 9iFS Manager に含まれる多くのタスクを実行します。これらのスクリプトの一部は、[第 4 章「インストール後の処理」](#)で説明されています。これらのスクリプトは、このマニュアルの索引の「スクリプト」の下、および『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』の索引にも記載されています。

インストール前の処理

Oracle Internet File System (Oracle 9iFS) ソフトウェアをインストールする前に、Oracle9i データベースをインストールするか、またはデータベースを Oracle9i にアップグレードしておく必要があります。データベースと Oracle 9iFS を同じマシンにインストールするか、または別のマシンにインストールするかを決めておく必要もあります。この決定は、ハードウェア要件およびパフォーマンスに影響を及ぼします。

この章では次の項目について説明します。

- [インストールの概要](#)
- [ハードウェア要件](#)
- [インストール前の作業](#)

インストールの概要

Oracle Internet File System (Oracle 9iFS) は、Oracle9i データベース上で実行されるファイル・システムおよび開発プラットフォームです。Oracle 9iFS は、共通リポジトリ内で様々なタイプの情報を作成、格納および管理するためのメカニズムを提供し、ユーザーがこれらの情報に対してアクセスおよび更新できるようにします。インストールの前に、実装方針を検討し、『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』に記載されている Oracle 9iFS のシステム・コンポーネント、概念および用語を理解しておく必要があります。

Oracle 9iFS をインストールするには、次の手順に従ってください。

1. Oracle 9iFS および Oracle9i データベースを同じマシンにインストールするかどうかを決定します。これに基づいて実装の計画を作成し、システムがハードウェア、ディスク、メモリーおよびネットワークの要件を満たしていることを確認します。
2. 既存のデータベースおよび Oracle Internet File System のリポジトリのバックアップ、Solaris 環境の構成、Oracle9i データベースのインストール、Oracle Enterprise Manager の設定、インストールのための関連プロセスおよび関連製品の準備など、インストールについて必要な前処理を行います。

3. Oracle Universal Installer を実行して、Oracle 9iFS サーバーおよびその関連ソフトウェア製品をインストールします。
4. Oracle 9iFS Configuration Assistant を使用して、Oracle 9iFS を構成します。Oracle 9iFS のインストールが完了すると、Oracle Universal Installer によって Oracle 9iFS Configuration Assistant が自動的に起動します。

Oracle 9iFS システムのカスタマイズ方法およびメンテナンス方法の手順は、『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』を参照してください。

Oracle 9iFS サーバーのインストールおよびメンテナンスを行うには、少なくとも基本的なデータベース管理の用語と手順を理解していることが前提となります。

ハードウェア要件

Oracle 9iFS は、インストール方法および構成方法により、Oracle9i データベース がインストールされているマシンと同じマシンで実行することも、別のマシンで実行することも可能です。

Oracle 9iFS の最小のハードウェア要件は、様々な要因によって異なります。要因の例として、特定のコンピュータ・システムのハードウェアとオペレーティング・システム、ネットワークのトポロジと容量、ユーザーの合計数、ユーザーのアクティビティ、Oracle データベースのサイズ、および同じリソースを共有する他のアプリケーション・サーバーなどがあげられます。

Oracle 9iFS では、最小構成または推奨構成としてのインストールをサポートしています。最小構成は開発環境として使用し、本番環境では使用しないでください。推奨構成は、ワークグループをサポートするために設計されています。熟練したデータベース管理者であれば、特定の要件をサポートするように Oracle 9iFS を手動で構成することもできます。

ハードウェア： 最小構成

次に示す構成の数値は、2層構造で、すべてのプロトコル・サーバーを実行する場合の数値です。この構成では約2人のユーザーが2つのプロトコルで同時にアクセスするという環境をサポートします。

- Sun Ultra 10
- 512 MB の RAM および 1 GB のスワップ領域
- 5 GB のディスク領域（データベース用に 4.5 GB、Oracle 9iFS 用に 500 MB）

注意： Oracle Enterprise Manager コンソールとすべての Oracle 9iFS プロトコル・サーバーを同時に実行する予定がない場合、RAM が 512 MB 未満であっても、Oracle9i データベースと同じマシンで Oracle 9iFS を実行できる可能性があります。

ハードウェア：推奨構成

データベースと Oracle 9iFS を同じマシンで実行する場合、この構成では約 50 人のユーザーが各プロトコルを適度に使用してアクセスするという環境をサポートします。この構成には、Oracle Enterprise Manager コンソールの実行は含まれません。その場合は、追加のリソースが必要になります。50 人以上のユーザーが Oracle 9iFS サーバーに接続する予定の場合、Oracle9i データベースと Oracle 9iFS は別々のマシンにインストールする必要があります。

- Sun Ultra 60 (デュアル・プロセッサ)
- 1 GB の RAM および 2 GB のスワップ領域
- 5 GB のディスク領域 (データベース用に 4.5 GB、Oracle 9iFS 用に 500 MB)

インストール前の作業

Oracle 9iFS のインストールの準備として、このセクションに記載されているインストール前の作業を実行します。指示には慎重に従ってください。

- 作業 1: 使用可能なハード・ディスク領域の確認
- 作業 2: 既存のデータベースおよびログ・ファイルのバックアップ
- 作業 3: Oracle9i データベースのインストール
- 作業 4: データベース・マシンの構成
- 作業 5: データベース・パラメータの設定
- 作業 6: Oracle 9iFS のインストールに必要なプロセスの起動
- 作業 7: Oracle Enterprise Manager の設定

作業 1: 使用可能なハード・ディスク領域の確認

Oracle9i データベースをインストールするマシンに、少なくとも 4.5 GB の使用可能なハード・ディスク領域があることを確認します。Oracle 9iFS をインストールするマシンに、少なくとも 500 MB の使用可能なハード・ディスク領域があることを確認します (Oracle 9iFS と Oracle9i データベースを同じマシンにインストールする場合は、5 GB が必要です)。

作業 2: 既存のデータベースおよびログ・ファイルのバックアップ

既存の Oracle データベースがある場合は、新規インストールの前に全体バックアップを実行します。全体バックアップを実行しておくこと、新規インストール・プロセスの際に発生したエラーからリカバリできます。

このバックアップは、データベースを完全に停止してから実行します。SHUTDOWN IMMEDIATE または SHUTDOWN ABORT を使用してユーザーにシステムからのログオフ

を強制する場合、制限モードでデータベースを再起動し、続いて通常優先度でデータベースを停止してください。詳細は、『Oracle9i データベース管理者ガイド』または『Oracle9i ユーザー管理バックアップおよびリカバリ・ガイド』を参照してください。

Oracle データベースのインストール・ログ・ファイルは、次のディレクトリに格納されています。

```
$ORACLE_HOME/..oraInventory/logs
```

これらのログ・ファイルもバックアップしてください。

作業 3: Oracle9i データベースのインストール

Oracle 9iFS は、Oracle9i データベースを使用して、ドキュメント、フォルダおよびユーザーなどのすべてのオブジェクトをリポジトリに格納します。

Oracle9i データベースのインストールの詳細は、『Oracle9i データベース管理者ガイド』を参照してください。

2 層構造 (単一のマシン) : Oracle 9iFS サーバーと Oracle9i データベースを同じマシンにインストールする場合、次のソフトウェアをインストールする必要があります。

- 「Solaris のパッチ」に記載されているパッチが適用された Sun SPARC Solaris 8 または Solaris 7
- 次の機能を備えた Oracle9i データベース リリース 1 (9.0.1) の Enterprise Edition または Standard Edition
 - Oracle JVM
 - Oracle Partitioning (オプション) Enterprise Edition でのみ使用可能です。
 - Oracle Text (オプション) ドキュメントの内容で検索する場合に必要です。

注意 : Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 は、3 層構造にのみ対応しています。

- Oracle JDBC/OCI Driver for Java 1.1 および 1.2
- Oracle HTTP Server powered by Apache
- Oracle Enterprise Manager クライアント
- Oracle Management Server
- SQL*Plus
- Oracle Intelligent Agent

Oracle Partitioning を使用すると、大きな表を小さく分割し、アプリケーション・レベルの単一データ・ビューを維持しながら、分割されたそれぞれを個別に管理できます。Oracle Partitioning を有効にすると、特に Oracle 9iFS のリポジトリが大きい場合にパフォーマンスの面で利点があります。

3層構造（別のマシン）： Oracle 9iFS サーバーと Oracle9i データベースを別のマシンにインストールする場合、各マシンに次のソフトウェアをインストールする必要があります。

注意： 3層構造を使用する場合、Oracle9i クライアントがデータベース・マシンに接続するように最初に構成する必要があります。詳細は、『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

データベース・マシンにインストールするもの

- 「[Solaris のパッチ](#)」に記載されているパッチが適用された Sun SPARC Solaris 8 または Solaris 7
- 次の機能を備えた Oracle9i データベース リリース 1 (9.0.1) の Enterprise Edition または Standard Edition、または Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 の Enterprise Edition または Workgroup Server
 - Oracle JVM
 - Oracle Partitioning (オプション) Enterprise Edition でのみ使用可能です。
 - Oracle Text (オプション) ドキュメントの内容で検索する場合に必要です。

Oracle 9iFS サーバー・マシンにインストールするもの

- Oracle JDBC/OCI Driver for Java 1.1 および 1.2
- Oracle9i クライアント リリース 1 (9.0.1) の「管理者」タイプ

注意： 使用しているデータベースが Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 の場合でも、Oracle9i クライアントをインストールする必要があります。

- Oracle HTTP Server powered by Apache
- Oracle Enterprise Manager クライアント
- SQL*Plus
- Oracle Intelligent Agent
- Oracle Management Server

注意： Oracle9i クライアントを使用するには、Oracle HTTP Server powered by Apache をインストールしておく必要があります。Oracle 9iFS には、Oracle HTTP Server powered by Apache が必要です。Oracle HTTP Server powered by Apache は、Oracle9i クライアントの一部ではありません。

SDK/JRE のバージョン

Oracle 9iFS は、JRE 1.2.2_05a が同梱され、デフォルトではこれを使用するように構成されています。Oracle 9iFS は、SDK 1.2.2_05a および JRE 1.3.0 にも対応しています。第4章「インストール後の処理」の「JRE 1.3.0 の構成と使用」を参照してください。

Solaris のパッチ

次の表に、SDK 1.2.2_05a の推奨パッチを示します。これらのパッチは、Solaris 7 で SDK 1.2.2_05a を実行していることを前提にしています。

これらのパッチは、Sun 社から入手してください。各パッチ ID でダッシュの後にある 2 桁の数字は、そのパッチのリビジョン番号です。この表に記載されているのは、使用できる最小のリビジョン番号です。それより後のリビジョン番号も使用可能です。

ここに記載されているパッチ以外でも、使用する Solaris のバージョンに応じた最新のパッチをインストールすることもできます。最新のパッチには、追加のセキュリティやその他の推奨パッチも含まれています。

Solaris のバージョン	パッチ ID	必須または推奨	説明
7	106980-10	必須	libthread パッチ
	107636-03	必須	X Input & Output Method パッチ
	107081-11	必須	Motif 1.2.7 および 2.1.1: Solaris 7 用ランタイム・ライブラリ・パッチ
	108376-03	必須	OpenWindows 3.6.1 Xsun パッチ ¹
	107285-03	必須	SunOS 5.7: passwd および pam ライブラリ・パッチ
	107656-07	必須	OpenWindows 3.6.1 libXt パッチ

¹ このパッチは、アジア・ロケールで必須です。

パッチの詳細は、Sun 社の Web サイト (<http://sunsolve.sun.com>) を参照してください。

作業 4: データベース・マシンの構成

Oracle9i データベースのインストールを完了した後、これを Oracle 9iFS 用に構成する必要があります。データベースのインストールが Enterprise Edition または Standard Edition のデフォルト・インストールでない場合は、データベースを Oracle 9iFS 用に構成にするためにいくつかの作業を実行する必要があります。

1. 環境変数 ORACLE_HOME が、Oracle9i データベースのインストール・ディレクトリに設定されていることを確認します。
2. PATH 環境変数に \$ORACLE_HOME/bin を追加します。
3. LD_LIBRARY_PATH 環境変数に \$ORACLE_HOME/lib を追加します。
4. ORACLE_SID 環境変数が Oracle9i データベースのインストール時に選択した SID に設定されていることを確認します。
5. **すべての構成に必要な作業:** Oracle 9iFS をインストールするマシンで、TNS サービス名がデータベースに接続するように構成されている必要があります。これを行うには、次の場所に格納されている Oracle Net Manager を使用します。

```
$ORACLE_HOME/bin/netmgr
```

このオプションを正しく構成するには、Oracle 9iFS で使用する Oracle9i データベースを識別するための新しいローカル・サービス名を作成する必要があります。データベースが Oracle 9iFS と同じマシンにあるかどうかに関係なく、データベースの TNS 名のエントリを作成してください。

または、tnsnames.ora ファイルを手動で編集することも可能です。TNS サービス名の構成の詳細は、『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

作業 5: データベース・パラメータの設定

Oracle 9iFS をインストールする際に、サーバー・マシンで特定のデータベース・パラメータを再構成する必要があります。

1. 次に示す Oracle 初期化パラメータを指定された値に設定します。これらのパラメータは、次のディレクトリの init<sid>.ora に格納されています。

```
$ORACLE_HOME/dbs/init<sid>.ora
```

注意: データベースのインストール方法によっては、この構成ファイルは別のディレクトリに格納される場合があります。

- open_cursors の値を 255 以上に設定します。
- shared_pool_size の値を 9M 以上に設定します。
- processes の値を 200 以上に設定します。

2. データベースを停止します。

- SQL*Plus を使用してデータベースを停止するには、次のようにします。

```
$ sqlplus /nolog
SQL> connect sys/<sys_password> as sysdba
接続されました。
SQL> shutdown [immediate]
データベースがクローズされました。
データベースがアンマウントされました。
ORACLE インスタンスがシャットダウンされました。
SQL> exit
```

3. Solaris 環境をデータベースと対応するように構成します。そのためには、`/etc/system` ファイルを編集して、次の変数を変更します。

- SEMMSL を、システム上の Oracle データベースにおける PROCESSES パラメータの最大値に 10 を加算した値に設定します。
- SEMMNS を各 Oracle データベースの PROCESSES パラメータの合計値に設定します。この値は、PROCESSES パラメータの最大値を 2 回加算し、さらにデータベースごとに 10 ずつ加算して算出します。

注意： `/etc/system` ファイルの変更後は、Solaris を再起動する必要があります。システムを再起動しない場合、必要なカーネルの再構成が実行されません。

詳細は、『Oracle9i データベース管理者ガイド』を参照してください。

作業 6: Oracle 9iFS のインストールに必要なプロセスの起動

Oracle データベースをインストールしたユーザー（通常は、'oracle'）で、次の手順を実行します。

1. リスナーを起動します。

```
$lsnrctl start
```

2. データベースを起動します。

```
$ sqlplus /nolog
SQL> connect sys/<sys password> as sysdba
接続されました。
SQL> startup
```

3. 次の SQL 文を実行します。

```
SQL> SELECT name, value FROM v$parameter WHERE name = 'open_cursors';
```

「作業 5: データベース・パラメータの設定」で `init<sid>.ora` ファイルに入力した `open_cursors` の値が表示されます。詳細は、『Oracle9i データベース管理者ガイド』を参照してください。

作業 7: Oracle Enterprise Manager の設定

Enterprise Edition または Standard Edition のインストールで、Oracle9i データベース・サーバーまたは Oracle9i Management and Integration を Solaris にインストールした場合は、Oracle Enterprise Manager がすでにインストールされています (Intelligent Agent、Oracle Management Server、および Oracle Enterprise Manager コンソールとその他の管理ツールを含む Oracle Enterprise Manager クライアントがインストールされています)。

Oracle Enterprise Manager を設定するには、Oracle データベースをインストールしたユーザー (通常は、'oracle') で次の手順を実行します。詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

Oracle Enterprise Manager のリポジトリの作成

1. 次の場所に格納されている Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant (EMCA) を起動します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emca
```

2. 「ようこそ」 ページで「次へ」をクリックします。
3. 「構成操作」 ページで、「ローカルの Oracle Management Server を構成します。」を選択して「次へ」をクリックします。

構成がすでに存在する場合、その構成を編集するか、または新しい構成を作成するかを選択するダイアログ・ボックスが表示されます。「編集」ボタンまたは「作成」ボタンをクリックします。「作成」ボタンをクリックすると、「Oracle Management Server の構成」 ページが表示されます。

4. 「Oracle Management Server の構成」 ページで「新規リポジトリの作成」を選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「新規リポジトリ作成オプション」 ページで「カスタム」を選択し、「次へ」をクリックします。
6. 「データベースの場所の選択」 ページで「別の既存データベース内」を選択し、「次へ」をクリックします。
7. 「リポジトリのデータベースの選択」 ページで、次の項目を入力します。

ユーザー名およびパスワード: データベースには、DBA 権限があるユーザーとして接続する必要があります。Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant では、リポ

ジトリを格納するためのデータベースに新規ユーザーを作成する際、および Configuration Assistant でデータベースまたはリポジトリに関する問合せを実行する際に DBA アカウントが要求されます。これは、Oracle Enterprise Manager の管理者アカウントではなく、個々のデータベース・ユーザー・アカウントです。

例: `sys/change_on_install`

サービス: サービスは、Oracle Net Manager を使用して作成したサービス名として、または次のような書式で指定できます。

`<host>:<port>:<sid>`

各要素は次のとおりです。

- `<host>` は、データベースが存在するマシン名です。
- `<port>` はデータベース・リスナーのポート・アドレスで、通常は 1521 です。
- `<sid>` は、データベースのシステム識別子です。

接続モード: SYSDBA

8. 「次へ」をクリックします。
9. 「リポジトリへのログイン情報」 ページで、次の項目を入力します。

ユーザー名: 新しい Enterprise Manager のリポジトリを所有する新しいデータベース・ユーザー名を入力します。デフォルトで入力されている名前を使用することも可能です。Intelligent Agent は各 Management Server をリポジトリ名で識別するため、リポジトリのユーザー名はネットワーク内で一意にする必要があります。別々のデータベースに同じ名前のリポジトリが 2 つ存在する場合、Intelligent Agent で Management Server に接続できなくなります。

パスワード: ユーザーのパスワードを入力します。

確認: 確認のため、パスワードを再度入力します。

注意: このユーザー名とパスワードは ifsomsssetup スクリプトを実行する際に必要になるため、ユーザー名とパスワードを書き留めておくことをお勧めします。

10. 「次へ」をクリックします。
11. 「リポジトリ・ユーザー表領域の選択」 ページで、「次へ」をクリックします。
12. 「リポジトリ作成のサマリー」 ページで、「完了」をクリックします。

Oracle 9iFS ソフトウェアのインストール

この章では、Oracle 9iFS のインストール手順を説明します。次の項目について説明します。

- [Oracle Universal Installer の実行](#)
- [Configuration Assistant の実行](#)

Oracle Universal Installer の実行

注意： Oracle 9iFS をインストールおよび構成する前に、リソースの競合を回避するため、必要のないアプリケーションをすべて終了することをお勧めします。

1. Oracle CD から Oracle 9iFS ソフトウェアにアクセスします。
2. CD 内の次の場所から Oracle Universal Installer を実行します。
`<CD-ROM>/install/solaris/runInstaller`
3. 「ようこそ」 ページで、「次へ」をクリックします。
4. 「ファイルの場所」 ページの「ソース ...」 フィールドで、`products.jar` ファイルの場所をそのまま受け入れるか、または製品 CD から選択します。「インストール先 ...」 フィールドで、Oracle 9iFS ソフトウェアをインストールするディレクトリのフルパスを入力または選択します。Oracle 9iFS は、必ずアクティブな `ORACLE_HOME` ディレクトリにインストールする必要があります。インストールされた Oracle 9iFS ソフトウェアは、削除および再インストールしないかぎり移動できないため、インストール先は慎重に選択してください。
5. 「次へ」をクリックします。
6. 「サマリー」 ページで「インストール」をクリックすると、インストールが開始されます。インストールの進捗状況がプログレス・バーに表示されます。

Configuration Assistant の実行

インストールが完了すると、Oracle Universal Installer によって Oracle 9iFS Configuration Assistant が自動的に起動します。

図 3-1 Oracle 9iFS Configuration Assistant



Oracle 9iFS Configuration Assistant は、Oracle 9iFS の構成パラメータを指定するためのウィザードです。必要な選択を行い、「次へ」ボタンをクリックして次の画面に進みます。

「取消」ボタンをクリックすると構成が中止されますが、後でも実行できます。後で Oracle 9iFS を構成する場合、または Oracle 9iFS を再構成する場合は、次のディレクトリに格納されている ifconfig スクリプトを実行します。

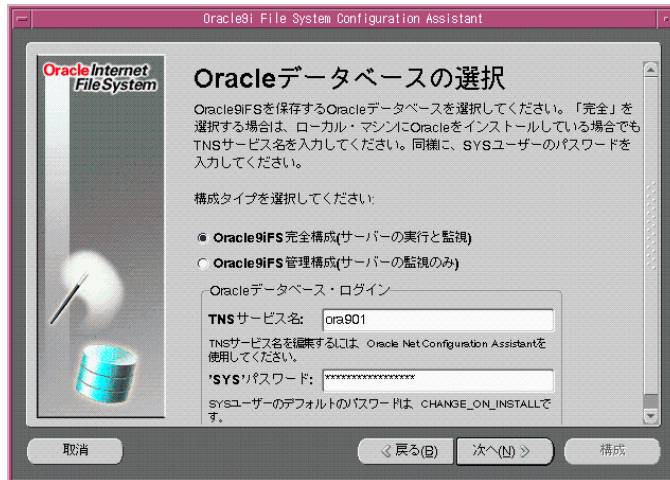
```
$ORACLE_HOME/9ifs/bin
```

Oracle 9iFS Configuration Assistant の処理を監視するには、次のファイルを参照します。このファイルには、構成プロセスの詳細なログが書き込まれます。

```
$ORACLE_HOME/9ifs/log/IfsConfigOut.log
```

1. 「ようこそ」 ページで、「次へ」ボタンをクリックして構成プロセスを開始します。
2. 「Oracle データベースの選択」 ページで、このホストの構成タイプとして「Oracle 9iFS 完全構成」または「Oracle 9iFS 管理構成」のいずれかを選択します。

図 3-2 「Oracle データベースの選択」 ページ



- Oracle 9iFS サーバーを実行するには、「Oracle 9iFS 完全構成」を選択する必要があります。
- このホストを Oracle 9iFS ドメインの管理のみを目的として使用する場合は、「Oracle 9iFS 管理構成」を選択します。「次へ」ボタンをクリックした後、手順 15 に進んでください。

注意： Oracle 9iFS 製品をインストールするには、Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 以上のデータベースを実行している必要があります。

3. 「Oracle 9iFS 完全構成」を選択した場合は、データベースを Oracle 9iFS と同じマシンにインストールしたかどうかに関係なく、Oracle 9iFS で使用するデータベースに対応する TNS サービス名を指定します。

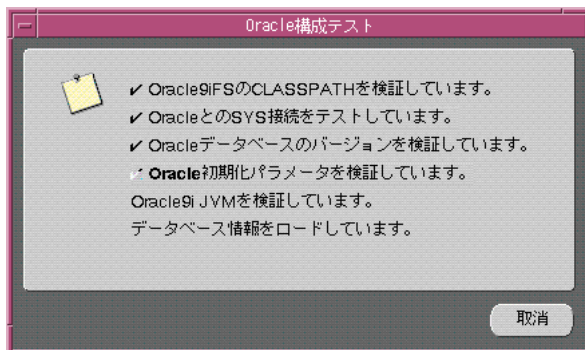
次の情報を入力します。

表 3-1 Oracle データベースのログイン・パラメータ

パラメータ	説明
TNS サービス名	Oracle 9iFS で使用するデータベース・サーバーを識別するために使用します。TNS サービス名により、データベースのホスト名、ポート、プロトコルおよびサービス名を指定します。詳細は、『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』を参照してください。
'SYS' パスワード	'SYS' データベース・ユーザーのパスワード。デフォルトは、change_on_install です。

- 「次へ」ボタンをクリックして、データベース接続を検証します。ダイアログ・ボックスが表示され、次の図に示されている検証が行われます。

図 3-3 「Oracle 構成テスト」ダイアログ・ボックス



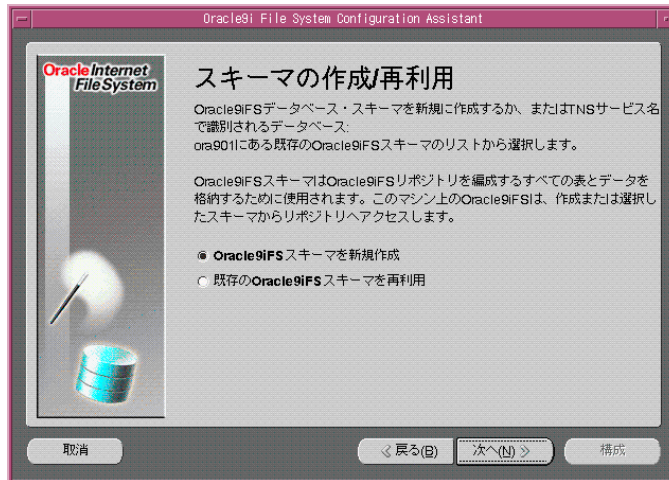
エラーが発生した場合、問題を修正しなければ処理を続行できません。

- データベースにスキーマが存在しない場合、「新規リポジトリの作成」ページが表示されます。その場合は手順7に進んでください。

または

データベースに少なくとも1つのスキーマが存在する場合は、「スキーマの作成 / 再利用」ページが表示されます。

図 3-4 「スキーマの作成 / 再利用」 ページ



新規の Oracle 9iFS スキーマを作成するか、または既存のスキーマを再利用するかを選択します。次のようなオプションがあります。

- 初めて Oracle 9iFS をインストールする場合など、新規のリポジトリを作成する必要がある場合は、新規のスキーマを作成します。
- 新規スキーマを作成済で、同じドメインに複数のマシン（ノード）を追加する場合は、既存のスキーマを再利用します。

新規スキーマの作成時に、管理者は実行するプロトコル・サーバーを選択し、そのサーバーを実行するポートを割り当てることができます。この選択は、新規のスキーマを作成する場合にのみ行うことができます。

Oracle 9iFS Configuration Assistant は、Oracle 9iFS がインストールされている各中間層で実行する必要があります。情報はリポジトリ内の 1 つのサーバー構成オブジェクトに格納されるため、すべての中間層が同じ構成を使用することになります。そのためには、「既存の Oracle 9iFS スキーマを再利用」オプションを使用します。

6. 必要な選択を行い、「次へ」ボタンをクリックします。
 - 新規の Oracle 9iFS スキーマの作成を選択した場合は、「新規リポジトリの作成」ページが表示されます。
手順 7 に進みます。
 - 既存のスキーマの再利用を選択した場合は、「Oracle 9iFS スキーマの選択」ページが表示されます。
手順 13 に進みます。

7. (新規スキーマの設定、続き) 「新規リポジトリの作成」 ページで、新しいスキーマの名前 (デフォルトは、ifssys) およびパスワードを入力します (確認のため、パスワードの再入力を要求されます)。

図 3-5 「新規リポジトリの作成」 ページ



既存のスキーマと同じ名前で新規のスキーマを作成しようとした場合、警告メッセージが表示されます。

警告： 既存のスキーマと同じ名前で新規のスキーマを作成すると、Oracle 9iFS のセキュリティ・スキーマ (<schemaname>\$CM) だけでなく、既存のスキーマとそのすべての内容が削除されます。この場合、元に戻すことはできません。

8. 「Oracle 9iFS オプションの設定」 ページで、「すべての Oracle 9iFS 記憶域に "USERS" 表領域を使用」を選択してデフォルトの表領域設定を使用するか、または「カスタム表領域を選択」を選択して独自の表領域を指定します。

図 3-6 「Oracle 9iFS オプションの設定」 ページ



- 新規の表領域を作成する場合は、デフォルトのままで「次へ」をクリックします。手順 11 に進みます。
- 独自の表領域を作成済の場合は、「カスタム表領域を選択」を選択して「次へ」をクリックします。手順 9 に進みます。

注意： カスタム表領域オプションを選択する場合は、必要な表領域がすでに作成されていることを確認してください。Oracle 9iFS Configuration Assistant では、表領域は作成できません。

9. 「Oracle 9iFS 表領域」 ページで、使用する表領域をドロップダウン・リストから選択します。

図 3-7 「Oracle 9iFS 表領域」 ページ



パフォーマンスを最大限に向上させるため、これらの表領域をそれぞれ別のディスクに格納することをお勧めします。

表 3-2 表領域の説明

表領域	説明
プライマリ	ドキュメントのメタデータ、ユーザーやグループに関する情報およびその他の Oracle 9iFS オブジェクト・データを格納します。
索引付けされていないメディア	イメージ、オーディオおよびビデオのファイルなど、Oracle9i データベース Text によって索引付けされていないドキュメントの LOB データを格納します。
索引付けされたメディア	テキスト・ファイルおよびワード・プロセッシング・ファイルなど、Oracle9i データベース Text によって索引付けされたドキュメントの LOB データを格納します。
interMedia メディア	Oracle 9iFS ドキュメントに関する Oracle9i データベース・メディア・データを格納します。
Oracle Text 索引	Oracle9i データベースのデータの Oracle 索引を格納します。
Oracle Text キー・マップ	Oracle9i データベースのテキスト・データの Oracle 索引を格納します。

表領域	説明
Oracle Text データ	Oracle 9iFS ドキュメントに関する Oracle9i データベースのテキスト・データを格納します。

- 「次へ」をクリックします。データベースが Oracle Text 用に構成されている場合、Oracle Text の検証が行われます。
- 「Oracle 9iFS プロセス」ページで、ローカル・マシンで実行するコンポーネント、および選択したプロセスがリスニングを行うポートを指定します。

図 3-8 「Oracle 9iFS プロセス」ページ



表 3-3 Oracle 9iFS プロセスの説明

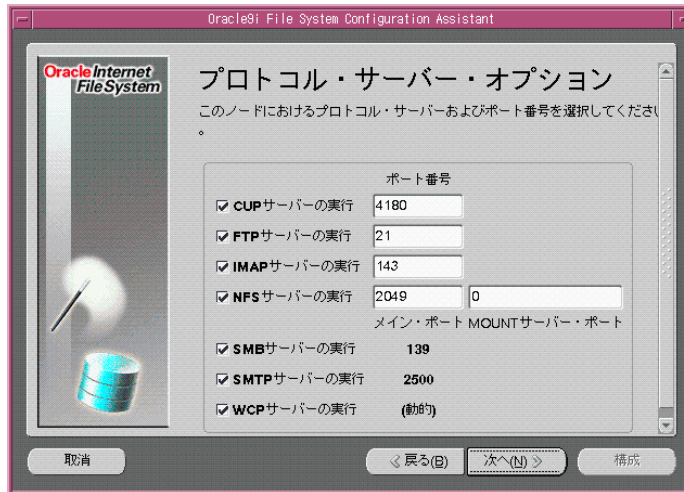
プロセス	説明
ローカル・ホスト名	Oracle 9iFS を構成するマシンのホスト名。使用するコンピュータに複数のネットワーク・インタフェースがある場合（2つのイーサネット・カードがそれぞれ別のネットワークに接続している場合など）は、このホスト名を変更するだけで対応できません。

プロセス	説明
ドメイン・コントローラの実行	このマシンで Oracle 9iFS ドメイン・コントローラを実行するように構成します。各ドメインで、1つのドメイン・コントローラのみが実行可能です。
ノードの実行	このマシンで Oracle 9iFS プロトコル・サーバーを実行するように構成します。
Oracle 9iFS システム・エージェントの実行	このマシンですべての Oracle 9iFS システム・エージェントを実行するように構成します。エージェントは、1つのノードでのみ実行してください。
Oracle 9iFS プロトコル・サーバーの実行	Oracle 9iFS プロトコル・サーバーを実行するように構成します。これを選択した場合、このドメインのすべてのノードで使用するポートを入力するための「プロトコル・サーバー・オプション」ページが次に表示されます。
HTTP ノードの実行	HTTP アクセスのための Oracle 9iFS DAV サーバーをこのマシンで実行するようにノードを構成します。

注意：「スキーマの作成 / 再利用」ページで「Oracle 9iFS スキーマを新規作成」を選択した場合は、「ドメイン・コントローラの実行」オプションを必ず選択してください。選択しない場合、「既存の Oracle 9iFS スキーマを再利用」を選択した場合と同様に、このページは表示されません。

- a. 「Oracle 9iFS プロトコル・サーバーの実行」を選択すると、「プロトコル・サーバー・オプション」ページが表示されます。

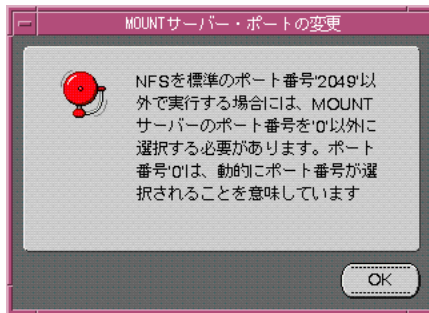
図 3-9 「プロトコル・サーバー・オプション」 ページ



デフォルトのポート番号を使用することも、これらを変更することもできます。NFS プロトコル・サーバーのメイン・ポートを変更する場合は、マウント・サーバー・ポイントも変更する必要があります。

注意： デフォルトでは、Oracle 9iFS における FTP、IMAP および NFS サーバーのポート番号は、Solaris における FTP、IMAP および NFS の標準の割当てポートと競合します。Oracle 9iFS のポート番号を変更するか、または Solaris の FTP、IMAP および NFS サーバーを停止あるいはこれらのポート番号を変更します。

図 3-10 「MOUNT サーバー・ポートの変更」 ダイアログ・ボックス



12. Oracle 9iFS のプロセスおよびプロトコル・サーバーのオプションを指定した後、「次へ」をクリックします。
「ドキュメントの内容」 ページが表示されます。手順 14 に進みます。
13. (既存のスキーマまたは管理構成の再利用、続き) 「Oracle 9iFS スキーマの選択」 ページで、使用するスキーマを選択し、そのパスワードを入力します。続いて、「次へ」をクリックします。

図 3-11 「Oracle 9iFS スキーマの選択」 ページ



14. 「ドキュメントの内容」ページで、Oracle 9iFS にドキュメントを格納する際に使用するデフォルトのキャラクタ・セットおよび索引付けする言語を選択します。続いて、「次へ」をクリックします。

これらのデフォルト値は、Oracle 9iFS に転送されるドキュメントの言語またはキャラクタ・セットをクライアントで指定しない場合に使用されます。FTP や WebDAV などの非 Unicode 対応プロトコルでも、これらのプロトコル・サーバーで使用するキャラクタ・セットを判断するために、このデフォルトのキャラクタ・セットが使用されます。

Oracle 9iFS をマルチ言語環境で使用する場合、データベース・キャラクタ・セットとして UTF8 を使用することをお勧めします。別のデータベース・キャラクタ・セットを指定すると、機能が制限される可能性があります。たとえば、すべての言語でのドキュメントの内容の検索、またはすべての言語での Web インタフェースの表示ができなくなります。

日本語の単一言語機能のみが必要な場合は、UTF8、JA16SJIS または JA16EUC のデータベース・キャラクタ・セットを使用してください。韓国語の単一言語機能が必要な場合は、UTF8 または KO16KSC5601 を使用します。中国語の単一言語機能が必要な場合は、UTF8、ZHS16CGB231280、ZHS16GBK、ZHT32EUC、ZHT16BIG5、ZHT32TRIS または AL24UTFFSS を使用します。

シングルバイトの言語機能のみが必要な場合は、UTF8 または Oracle9i データベースでサポートされているシングルバイトのキャラクタ・セットを使用します。

詳細は、『Oracle Text リファレンス』の「MULTI_LEXER」の項を参照してください。

図 3-12 「ドキュメントの内容」ページ



15. 「Oracle 9iFS 構成を開始」 ページで、「構成」 ボタンをクリックして Oracle 9iFS の構成プロセスを開始します。

図 3-13 「Oracle 9iFS 構成を開始」 ページ

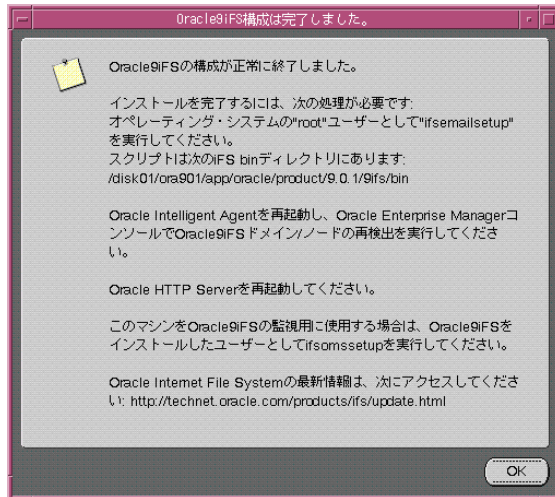


構成プロセスを開始すると、進捗状況を表すウィンドウが表示されます。エラーが発生した場合は、次のログ・ファイルで詳細を確認してください。

```
$ORACLE_HOME/9ifs/log/IfsConfigOut.log
```

構成が正常に完了したこと、およびインストール後の処理として必要な手順を示すダイアログ・ボックスが表示されます。

図 3-14 「Oracle 9iFS 構成は完了しました」 ダイアログ・ボックス



このダイアログ・ボックスに表示されている手順を実行する前に、第4章「インストール後の処理」の「Configuration Assistantによって設定された事項の有効化」の項を参照してください。

16. 「OK」をクリックします。
17. 「インストールの終了」ページで「終了」ボタンをクリックすると、Oracle Universal Installer が終了します。終了を確認するメッセージが表示された場合は「はい」をクリックします。

注意： \$ORACLE_HOME/9ifs/bin ディレクトリにある ifsssetup スクリプトは、構成の過程で自動的に実行されます。このスクリプトによって、Oracle Enterprise Manager コンソール、および Oracle HTTP Server powered by Apache で使用する Oracle 9iFS サブプレットの設定も行われます。

インストール後の処理

この章では、Oracle 9iFS のインストールにおける後処理の手順を説明します。次の項目について説明します。

- Configuration Assistant によって設定された事項の有効化
- Oracle Enterprise Manager コンソールからの Oracle 9iFS ドメインおよびノードの起動 / 停止
- コマンドラインからの Oracle 9iFS ドメインおよびノードの起動 / 停止
- Oracle HTTP Server での Oracle 9iFS サーブレットの実行
- Oracle 9iFS Portlet のインストール
- NFS サーバーの構成
- JRE 1.3.0 の構成と使用

Configuration Assistant によって設定された事項の有効化

Oracle 9iFS Configuration Assistant が正常に終了した後で、いくつかの構成作業を実行する必要があります。これらの作業には、Oracle 9iFS の管理ツール以外の作業など、手動で行う作業も含まれます。

Oracle 9iFS メール・サーバーの起動

Oracle 9iFS の電子メール・サーバーを使用する場合は、root ユーザーとして \$ORACLE_HOME/9ifs/bin から ifsemailsetup スクリプトを実行します。

このスクリプトは、パブリック・ドメイン sendmail を使用して Oracle 9iFS で電子メールを受信する場合にのみ実行します。ユーザーの受信ボックスで電子メールを受信しない場合、または Sendmail 社の sendmail を使用する場合は、このスクリプトを実行しないでください。ifsemailsetup スクリプトを実行すると、使用している sendmail (Solaris sendmail を使用している場合) および sendmail 構成ファイルが置き換えられます。

Intelligent Agent の再起動

Oracle 9iFS Configuration Assistant によってドメイン・コントローラおよびノードの構成設定が変更されるため、Intelligent Agent (IA) を再起動する必要があります。IA の起動時または再起動時に、環境変数として ORACLE_SID を定義する必要があります。詳細は、[第2章「インストール前の処理」](#)の「[作業5: データベース・パラメータの設定](#)」を参照してください。

Oracle データベースをインストールしたユーザー（通常は、'oracle'）で、次のコマンドを入力します。

```
$ agentctl stop
$ agentctl start
```

ホストの再検出

Oracle 9iFS Configuration Assistant によってドメイン・コントローラおよびノードの構成設定が変更されるため、Oracle Enterprise Manager コンソールで、ドメイン・コントローラおよびノードが存在するホストを再検出する必要があります。詳細は、『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』を参照してください。

Oracle HTTP Server powered by Apache の再起動

Oracle 9iFS Configuration Assistant によって HTTP ノードが変更されるため、\$ORACLE_HOME/Apache/Apache/bin に格納されている Oracle HTTP Server powered by Apache を再起動する必要があります。そのためには、次のコマンドを実行します。

```
$ apachectl stop
$ apachectl start
```

ifsomssetup の実行

このマシンから Oracle 9iFS を監視する場合は、ifsomssetup スクリプトを実行します（オプション）。ifsomssetup を実行すると、次の3つの値を要求されます。

- OEM リポジトリ・スキーマ名およびスキーマ・パスワード。[第2章「インストール前の処理」](#)の「[作業7: Oracle Enterprise Manager の設定](#)」で EMCA を実行する際に指定した値です。
- OEM リポジトリ TNS 名。OEM リポジトリを構成したデータベースのローカル TNS 名です。

ifsomssetup の実行後に、Oracle Management Server を再起動します。「[Oracle Management Server の起動](#)」を参照してください。

Oracle Enterprise Manager コンソールからの Oracle 9iFS ドメインおよびノードの起動 / 停止

Oracle 9iFS を起動するには、Oracle Management Server を起動し、続いてドメインを起動します。

Oracle Management Server の起動

Oracle データベースをインストールしたユーザー（通常は、'oracle'）で、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを入力します。

```
$ oemctl start oms
```

OMS 管理者 *sysman* のパスワードを変更するように要求されます。*sysman* の初期パスワードは、*oem_temp* です。

2. OMS のステータスのチェックまたは OMS の停止を実行するには、*sysman* のパスワードが *oemanager* であるとすれば、次のように入力します。

```
$ oemctl status oms sysman/oemanager  
$ oemctl stop oms sysman/oemanager
```

Oracle 9iFS ドメインおよびノードの起動

1. *oemapp console* スクリプトを使用し、Oracle Enterprise Manager コンソールを起動して OMS に接続します。
2. すべての中間層マシンで、Oracle 9iFS ターゲットを検出します。
3. 起動する Oracle 9iFS ドメイン・コントローラを選択し、「オブジェクト」メニューの「ドメインの開始」コマンドをクリックします。

Oracle 9iFS ドメインおよびノードの停止

1. ドメイン名を右クリックします。
2. 「オブジェクト」メニューから「ドメインの停止」を選択します。「Oracle9iFS ドメインの停止」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 自分のスキーマ・パスワードをデフォルト資格証明として保存している場合は、それが表示されます。それ以外の場合は、スキーマ・パスワードを入力します。後でパスワードを入力しなくても済むように、この時点でこのスキーマ・パスワードをデフォルト資格証明として保存できます。
4. ドメイン内のすべてのノードを停止するかどうかを選択します。

5. 「OK」をクリックします。

選択の内容に応じて、ドメインとノードが停止します。

コマンドラインからの Oracle 9iFS ドメインおよびノードの起動 / 停止

コマンドラインからドメインおよびノードを起動および停止することもできます。

コマンドラインからのドメインおよびノードの起動

ドメイン・コントローラを実行するマシンで、次の手順を実行します。

1. `$ORACLE_HOME/9ifs/bin` に格納されている `ifslaunchdc` スクリプトを使用して、ドメイン・コントローラを起動します。このスクリプトは、Oracle 9i データベースをインストールしたユーザーまたは `root` ユーザーで実行できます。
2. ノードを実行するマシンで、`$ORACLE_HOME/9ifs/bin` に格納されている `ifslaunchnode` スクリプトを使用してノードを起動します。このスクリプトを実行するには、`root` ユーザーである必要があります。
3. `$ORACLE_HOME/9ifs/bin` に格納されている `ifsstartdomain` スクリプトを使用して、ドメイン・コントローラを起動します。このスクリプトは、`ifslaunchdc` を実行したユーザーと同じユーザーで実行してください。

詳細は、『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』の第2章「Oracle 9iFS ドメインの管理」を参照してください。

コマンドラインからの Oracle 9iFS ドメインの停止

`$ORACLE_HOME/9ifs/bin` に格納されている `ifsstopdomain` スクリプトを実行します。このスクリプトは、`ifsstartdomain` を実行したユーザーと同じユーザーで実行してください。

Oracle HTTP Server での Oracle 9iFS サブレットの実行

Oracle HTTP Server は、Jserv と組みになった Apache をベースにしています。このインフラストラクチャの元で実行されるサブレットは、Web サーバーによって起動されるデフォルトの Jserv プロセスで実行することも、別のポートでリスニングを行う別の Jserv プロセスで実行することもできます。どちらの場合も、サブレットを適切に構成する必要があります。

別の Jserv プロセスでの Oracle 9iFS サブレットの実行

これは、Oracle 9iFS をインストールする際のデフォルトの構成です。使用する構成ファイルは、`jserv.conf`、`ifs.properties` および `ifsprops.properties` です。これらのファイルは、`<ORACLE_HOME>/Apache/Jserv/etc` に格納されています。

Oracle 9iFS Jserv の起動と停止

Oracle 9iFS Jserv プロセスを起動および停止する操作は、Apache サーバーを起動および停止する操作とは異なります。

`<ORACLE_HOME>/9ifs/bin` ディレクトリにあるスクリプト `ifsJservctl` を使用します。

<code>ifsJservctl -start</code>	9iFS Jserv プロセスを起動します。 Apache が実行中でない場合は、Apache も起動します。
<code>ifsJservctl -stop</code>	9iFS Jserv プロセスを停止します。 Apache が実行中の場合でも、Apache は停止しません。

デフォルトの Jserv プロセスでの実行

この構成を使用するには、`<ORACLE_HOME>/Apache/Jserv/etc` に格納されている次のファイルを変更する必要があります。

1. `jserv.conf`

次の行をコメント解除します (“#” を削除します)。

```
#ApJservMount /ifs /ifs
```

続いて、次の行をコメント・アウトします (“#” を追加します)。

```
ApJservMount /ifs ajpv12://localhost:13138/ifs
```

このファイルでは、各行の上に説明が記載されています。

2. `jserv.properties`

ファイル内の「# Additions for iFS」セクションに移動し、このセクション内のみで、すべてのラッパー宣言およびゾーン宣言をコメント解除します (“#” を削除します)。このセクションは、ファイル内で非常にわかりやすいマーキングが付けられています。

Oracle 9iFS Jserv プロセスが実行中の場合はこれを停止し、Apache を再起動します。Oracle 9iFS のサブレットは、`apachectl` コマンドを使用して Apache を起動または停止するだけで使用可能になります。

Apache の起動および停止には、<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/bin/ に格納されている `apachectl` コマンドを使用します。

停止: `apachectl stop`
起動: `apachectl start`

Oracle 9iFS Portlet のインストール

Oracle 9iFS Portlet は、ユーザーの Oracle 9iFS データに関する情報の概要を提供するための Oracle Portal のコンポーネントです。ユーザーはポートレットを使用して、自分への割当ての表示、検索の開始、ドキュメントやフォルダの一覧表示およびドキュメントのアップロードを行うことができます。ポートレットは、Oracle 9iFS Web インタフェースにリンクしています。ユーザーが各自の Oracle Portal にポートレットを追加する前に、管理者は設定および構成に関するいくつかの手順を実行する必要があります。

Oracle 9iFS Portlet の Oracle Portal への登録

Oracle Portal の管理者は、各自の Oracle Portal のインストールに Oracle 9iFS Portlet を追加できます。そのためには、Oracle Portal のホーム・ページで次のようにしてポートレットを Web プロバイダとして登録します。

1. Oracle Portal のホーム・ページで、「管理」タブをクリックします。
2. 「プロバイダ」ポートレットで、「ポートレット・プロバイダの追加」リンクをクリックします。
3. Web プロバイダを作成するためのフォームに、次のように入力します。

パラメータ	値
名前	9iFS
表示名	Oracle 9iFS
タイムアウト	100
タイムアウト・メッセージ	Oracle 9iFS Portlet がタイムアウトしました。
実装スタイル	Web
リモート・ノードに登録	いいえ
ログイン頻度	ユーザー・セッションごとに 1 回
URL	<code>http://<hostname>:<port>/ifs/portlet</code>
ポータルと同じ Cookie ドメインの Web プロバイダ	このチェックボックスをチェックしない

4. 「OK」をクリックします。

ポートレットを Oracle Portal のページに追加する方法の詳細は、Oracle Portal のマニュアルを参照してください。

ポートレット・プロバイダが実行中であることの検証

Oracle 9iFS ポートレット・プロバイダは、次の URL で使用できます。

```
http://<hostname>:<port>/ifs/portlet
```

hostname には、Oracle 9iFS をインストールしたマシンの名前が入ります。*port* には、Apache リスナーのポートが入ります。

デフォルトのパラメータの編集

Oracle 9iFS Manager を使用して、次に示すポートレットのデフォルトのパラメータを編集できます。これらのパラメータの変更の詳細は、『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』を参照してください。

- ポートレットの割当てセクションを表示するかどうかの設定：
IFS.SERVER.PROTOCOL.PORTLET.QuotaDisplayed=[true | false]
- ポートレットの検索セクションを表示するかどうかの設定：
IFS.SERVER.PROTOCOL.PORTLET.SearchDisplayed=[true | false]
- ファイル / フォルダのリストを表示するかどうかの設定：
IFS.SERVER.PROTOCOL.PORTLET.ItemListDisplayed=[true | false]
- トップレベルのフォルダを拡張できるようにするかどうかの設定：
IFS.SERVER.PROTOCOL.PORTLET.ExpandFolders=[true | false]
- 各トップレベル・フォルダに表示されるアイテム数の設定：
IFS.SERVER.PROTOCOL.PORTLET.FolderItemCount=4
- デフォルトで表示するファイル / フォルダの設定：
IFS.SERVER.PROTOCOL.PORTLET.FileList+=HOME_FOLDER
IFS.SERVER.PROTOCOL.PORTLET.FileList+=/public

図 4-1 Oracle 9iFS Portlet



NFS サーバーの構成

Oracle 9iFS Network File System (NFS) プロトコル・サーバーは、プライマリ NFS サーバーとしても、またはセカンダリ NFS サーバーとしても構成できます。UNIX システムでは通常、標準 UNIX NFS サーバーをプライマリ NFS サーバーにして、Oracle 9iFS NFS サーバーをセカンダリ NFS サーバーとして構成します。標準 UNIX NFS サーバーが停止している場合は、Oracle 9iFS NFS サーバーをプライマリ NFS サーバーとして構成できます。Windows NT システムには既存の NFS サーバーがないため、通常は、Oracle 9iFS NFS サーバーを Windows NT のプライマリ NFS サーバーとして構成します。

プライマリ NFS サーバーは、標準 NFS ポート（ポート 2049）で実行されます。プライマリ NFS サーバーおよびプライマリ MOUNT サーバーは、これらのサーバーのポート番号をクライアントで検索できるようにするポートマップ・サーバーにも登録されます。セカンダリ NFS サーバーは、使用されていない他の任意のポートで実行できます。セカンダリ MOUNT サーバーも、使用されていない任意のポートで実行できます。プライマリ NFS サーバーおよびプライマリ MOUNT サーバーの登録が上書きされないように、セカンダリ NFS サーバーおよびセカンダリ MOUNT サーバーはポートマップ・サーバーには登録されません。セカンダリ NFS サーバーおよびセカンダリ MOUNT サーバーはポートマップに登録されないため、セカンダリ NFS サーバーからマウントする際にクライアントではポート番号を明示的に指定する必要があります。

NFS のユーザー認証

Oracle 9iFS NFS サーバーでは、システム認証方式を使用しています。システム認証方式の場合、UNIX システムに一度ログインすると、再度 Oracle 9iFS にログインしなくても、NFS サーバーを介して Oracle 9iFS にアクセスできます。UNIX システムにログインするには、UNIX ユーザー名とパスワードを使用します。システム認証を使用すると、UNIX システムへのログイン後に NFS サーバーを介して Oracle 9iFS にアクセスする際に、Oracle 9iFS パスワードを指定する必要がありません。ユーザーは UNIX システムへのログイン時にすでに認証されているため、Oracle 9iFS へのアクセス権限が付与されます。UNIX のパスワードと Oracle 9iFS のパスワードは異なる場合がありますが、これらを同一にする必要はありません。

システム認証方式では、各 UNIX ユーザー・アカウントに割り当てられたユーザー ID 番号 (UID) を使用してユーザーを識別します。この識別では、サーバー・マシンとクライアント・マシンのすべてが共通のユーザー・アカウント定義のセットを共有していることを前提にしています。通常、管理者によってマシンが集中的に管理されているネットワーク環境では、この前提条件が満たされています。このようなネットワーク環境では、すべてのマシンが同一のユーザー・アカウントのセットを共有し、ユーザー・アカウントの UID は各マシンで同一になります。

Oracle 9iFS NFS サーバーでは、システム認証方式を使用して、クライアントから受信した各要求のユーザーの UID を受信します。Oracle 9iFS NFS サーバーは、この UID を Oracle 9iFS ユーザー名にマッピングし、このユーザー名を使用して Oracle 9iFS にアクセスします。通常、UID は UNIX ユーザー名と同一の Oracle 9iFS ユーザー名にマッピングされますが、UNIX ユーザー名とは異なる Oracle 9iFS ユーザー名に UID をマッピングすることもできます。Oracle 9iFS NFS サーバーが UID を Oracle 9iFS ユーザー名にマッピングできない場合、guest ユーザーとして Oracle 9iFS へのアクセスを許可します。

NFS の Oracle 9iFS ユーザーの構成

Oracle 9iFS NFS サーバーでは、UNIX の UID から Oracle 9iFS ユーザー名へのマッピングを定義するためのファイルを使用します。このファイルは、`/ifs/nfs/config/UidToName` という名前でも Oracle 9iFS リポジトリに格納されます。このファイルは、管理者権限があるユーザーが任意の Oracle 9iFS プロトコルを使用して表示または変更できます。このファイルの形式は、UNIX ユーザー名および UID が収められている標準 UNIX パスワード・ファイル (`/etc/passwd`) の形式に似ています。

初期インストールの終了時点では、すべての UNIX UID を Oracle 9iFS の guest ユーザーにマッピングするデフォルトのマッピングが `/ifs/nfs/config/UidToName` ファイルに収められています。UidToName ファイルを更新するには管理者権限が必要であるため、インストール後にこのファイルを最初に更新する場合、管理ユーザーが FTP や SMB などの別のプロトコルを使用して更新する必要があります。

Oracle 9iFS ユーザー名が UNIX ユーザー名と同じ場合、UNIX パスワード・ファイル (`/etc/passwd`) を `/ifs/nfs/config/UidToName` にコピーすることができます。ファイルをコピーすると、Oracle 9iFS NFS サーバーによって、UID が UNIX ユーザー名と同じ Oracle 9iFS ユーザー名にマッピングされます。`/etc/passwd` を

`/ifs/nfs/config/UidToName` にコピーした後で、`/ifs/nfs/config/UidToName` ファイルを編集して、UNIX の `root` ユーザー (UID が 0) を Oracle 9iFS への `root` アクセスに使用する Oracle 9iFS アカウントに変更してください。セキュリティ上の理由から、`root` ユーザーは Oracle 9iFS の `guest` アカウントにマッピングしてください。

Oracle 9iFS ユーザー名が UNIX ユーザー名と異なる場合は、`/ifs/nfs/config/UidToName` ファイルを編集し、UNIX の UID を Oracle 9iFS ユーザー名にマッピングするためのエントリを作成する必要があります。このファイルは UNIX パスワード・ファイルと同じ形式であり、各行はコロン区切りのフィールドで構成されています。Oracle 9iFS NFS サーバーは行を読み取る際に、次に示す最初の 3 つのフィールドのみを読み取ります。

```
username : password : uid :
```

`password` フィールドは無視され、`username` フィールドおよび `uid` フィールドのみを使用して、UID から Oracle 9iFS ユーザー名へのマッピングが作成されます。たとえば次のエントリでは、UNIX UID 1123 は Oracle 9iFS ユーザー `scott` にマッピングされ、UNIX UID 1124 は Oracle 9iFS ユーザー `guest` にマッピングされます。

```
scott:x:1123:  
guest:x:1124:
```

セキュリティに関する考慮点

システム認証方式は、サーバー・マシンとクライアント・マシンが同じユーザー・アカウントおよび UID を共有することを前提にしています。また、信頼できるクライアント・マシンであること、およびクライアント・マシンへの `root` アクセスが保護されていることも前提にしています。クライアント・マシンへの `root` アクセスが保護されていない場合、クライアント・マシン上のユーザーがサーバー・マシン上の別のユーザーと同じ UID のユーザーを作成し、そのユーザーとしてサーバー・マシンの NFS に簡単にアクセスできてしまいます。

このような理由により、重要なデータが格納されている Oracle 9iFS アカウントに対する Oracle 9iFS NFS サーバー経由のアクセスの制限が必要な場合もあります。

`/ifs/nfs/config/UidToName` ファイル内の UID マッピングを変更して、UID が別の Oracle 9iFS ユーザー名 (`guest` など) にマッピングされるように設定しても同様の効果があります。

NLS のサポート

NFS プロトコルの仕様では、ファイル名における非 ASCII 文字の使用は明示的にはサポートされていません。通常、NFS クライアントは、ファイル名などの文字列をクライアントのデフォルトのキャラクタ・エンコーディングで NFS サーバーに転送します。このような文字列を正確に解析するには、サーバー側で文字列を読み取る際にクライアント側と同じキャラクタ・エンコーディングを使用する必要があります。

Oracle 9iFS NFS サーバーには、クライアントから受信した文字列の解析時に使用するキャラクタ・エンコーディングを指定するパラメータがあります。このパラメータを設定するに

は、Oracle 9iFS Manager を使用して NFS サーバーの構成 (NfsServerConfiguration) を編集し、文字列の値タイプとともに次のパラメータ名を追加します。

```
IFS.SERVER.PROTOCOL.NFS.CharacterEncoding
```

このパラメータの値は、ISO8859_1 や CP437 などの Java キャラクタ・エンコーディング名に設定してください。この値が、クライアントから受信した文字列を解析するために Oracle 9iFS NFS サーバーで使用するキャラクタ・エンコーディングになります。

Hummingbird NFS Maestro Client のサポート

Hummingbird 社の NFS Maestro Client では、Oracle 9iFS NFS サーバーで提供されるサービスの他に、いくつかのサービスが必要になります。このサービスには次のものが含まれます。

- NFS サーバーのディレクトリにリンクするクライアントで使用されるユーザー名およびパスワードを検証するための認証サーバー。
- DOS 形式のロックをサポートするロック・サーバー。

Hummingbird 社は、hclnfsd というデーモン・プログラムでこれらのサービスを提供しています。hclnfsd プログラムは Hummingbird 社によって、様々な UNIX プラットフォーム用にコンパイル可能なソース・コード形式で提供されています。hclnfsd プログラムのコンパイルおよび実行の詳細は、Hummingbird NFS Maestro のマニュアルを参照してください。

NFS Maestro Client に対する認証サービスを利用するには、少なくとも 1 台の UNIX マシンで hclnfsd デーモンを実行する必要があります。hclnfsd デーモンを iFS NFS サーバー・マシン以外のマシンで実行する場合は、NFS Maestro Client でデフォルトの認証サーバーを hclnfsd デーモンが実行されているマシンに設定してください。

hclnfsd デーモンには、NFS Maestro Client 用の DOS 形式のロックをサポートするロック・サーバーも含まれています。DOS 形式のロックをサポートするには、iFS NFS サーバーと同じマシンで hclnfsd デーモンを実行する必要があります。複数の iFS NFS サーバー・マシンがある場合、hclnfsd デーモンはこれらの各マシンで起動してください。

hclnfsd デーモンを Oracle 9iFS NFS サーバー・マシンで実行していない場合、DOS 形式のロックはそのサーバーにリンクしている NFS Maestro Client に使用できません。DOS 形式のロックが使用できない場合でも、Oracle 9iFS は、2 人のユーザーによって 1 つのファイルが同時に更新されることを回避します。ただし、hclnfsd デーモンが使用不可能な場合に NFS Maestro Client が DOS 形式のロックの使用を試みると、動作が極端に遅くなり、NFS Maestro Client が停止したように見えることがあります。hclnfsd デーモンが使用不可能な場合、NFS Maestro Client で「DOS style sharing」ボックスのチェックを解除するか、またはコマンドラインで '/L:' オプションを指定して、DOS 形式のロックを無効化してください。

Windows NT 上の Oracle 9iFS サーバーでの考慮点

hclnfsd デーモンは、UNIX ベースのプログラムです。Windows NT システムで Oracle 9iFS NFS サーバーを実行する場合、認証サーバーとして hclnfsd デーモンを実行するネットワークには少なくとも 1 つの UNIX システムが必要です。Oracle 9iFS NFS サーバーを実行する Windows NT システムでは hclnfsd デーモンを実行できないため、Windows NT 上で実行される Oracle 9iFS NFS サーバーでは DOS 形式のロックを使用できません。Windows NT 上で実行される Oracle 9iFS NFS サーバーにリンクしている NFS Maestro Client では、DOS 形式の共有を無効化してください。

制限事項

Oracle 9iFS NFS サーバーには、次のような制限事項があります。

- Oracle 9iFS NFS サーバーでは、バージョンングされたドキュメントのチェックアウト済バージョンへのアクセスは許可されません。

これは、NFS クライアントのファイルのキャッシング・アルゴリズムに違反するためです。NFS では、パフォーマンスを向上させるために、クライアントでファイルをキャッシュします。クライアントのキャッシング・アルゴリズムでは、すべてのユーザーに対してファイルの内容が同じであること、およびキャッシュされたファイルの内容をそのファイルを要求する他のユーザーに返すことができることを前提としています。ドキュメントをチェックアウトしたユーザーは、他のユーザーとは異なる内容を参照する可能性があるため、チェックアウト済バージョンのドキュメントへのアクセスを許可すると、このルールに違反することになります。

- バージョニングされたドキュメントは、削除、移動または名前の変更はできません。

これは、MS Office などのプログラムがバージョンングされたドキュメントの旧バージョンを削除しないようにするためのルールです。MS Office などのプログラムがファイルを保存する場合、最初にデータをテンポラリ・ファイルに保存し、続いて元のファイルを削除してから、テンポラリ・ファイルを元のファイル名に変更します。バージョンングされたドキュメントの場合、このように処理すると旧バージョンが失われます。

- Oracle 9iFS NFS サーバーから返されたハンドルは、UNIX のロック・マネージャ (NLM) との互換性はありません。

プログラムが Oracle 9iFS NFS サーバーのファイルをロックしようとする時、UNIX のロック・マネージャからエラーが返されます。UNIX のロック・マネージャを必要とするプログラムは、Oracle 9iFS NFS サーバーでは使用できません。

- UNIX リンク（ハード・リンクおよびシンボリック・リンク）はサポートされていません。

UNIX 形式のリンクには、Oracle 9iFS との互換性はありません。かわりに、Oracle 9iFS リンクを使用できます。

- UNIX の `chown`、`chgrp` および `chmod` の各コマンドによる、ファイルの所有者、グループまたはモードの変更はサポートされていません。

Oracle 9iFS コマンドライン・ユーティリティを使用して、ファイルの所有者および Access Control List を変更できます。

JRE 1.3.0 の構成と使用

Oracle 9iFS は、JRE 1.2.2_05a とともに出荷され、デフォルトではこの JRE を使用するよう構成されています。Oracle 9iFS は、SDK 1.2.2_05a および JRE 1.3.0 にも対応しています。JRE 1.3.0 を使用して Oracle 9iFS サーバーを構成する場合は、次の手順を実行します。

1. <ORACLE_HOME/9ifs/bin に格納されている ifsenv.sh ファイルで、Oracle 9iFS Java ランタイム環境が JRE 1.3.0 を指すように変更します。

例：

```
IFS_JRE_HOME = $IFS_HOME/jre
```

このエントリを次のエントリで置き換えます。

```
IFS_JRE_HOME = <JRE_PATH>
```

<JRE_PATH> は、JRE 1.3.0 の場所を示します。

2. Oracle 9iFS サブレットを別の Jserv プロセスで実行している場合は、<ORACLE_HOME>/Apache/Jserv/etc に格納されている ifsprops.properties ファイルで、Java Virtual Machine インタプリタの場所を変更します。

例：

```
wrapper.bin = $ORACLE_HOME/9ifs/jre/bin/java
```

このエントリを次のエントリで置き換えます。

```
wrapper.bin = <JRE_PATH>/bin/java
```

3. Oracle 9iFS サブレットをデフォルトの Jserv プロセスで実行している場合は、<ORACLE_HOME>/Apache/Jserv/etc に格納されている jserv.properties ファイルで、Java Virtual Machine インタプリタの場所を変更します。

例：

```
wrapper.bin = $ORACLE_HOME/Apache/jdk/bin/java
```

このエントリを次のエントリで置き換えます。

```
wrapper.bin = <JRE_PATH>/bin/java
```

4. ドメイン・コントローラ、Oracle 9iFS ノードおよび Oracle 9iFS Jserv プロセスまたは Oracle HTTP Server powered by Apache を停止および再起動します。

注意： ifsconfig を再度実行する場合は、この変更をもう一度行う必要があります。

クライアント・パッケージのインストール

この章では、Oracle 9iFS で使用するクライアント・パッケージのインストール方法を説明します。管理者およびエンド・ユーザー向けの様々なクライアントがあります。次の項目について説明します。

- [Oracle 9iFS Windows ユーティリティのインストール](#)
- [HTTP を介した Oracle 9iFS へのアクセス](#)
- [Oracle 9iFS Portlet の Oracle Portal への登録](#)
- [Oracle 9iFS FileSync ユーティリティのインストール](#)
- [コマンドライン・クライアント・ユーティリティのインストール](#)
- [NFS クライアントの構成](#)

Oracle 9iFS Windows ユーティリティのインストール

Oracle 9iFS Windows ユーティリティを使用すると、Microsoft Windows クライアントでチェックイン / チェックアウトやバージョンングなどのコンテンツ管理機能を利用できます。

注意： Oracle 9iFS Windows ユーティリティをインストールせずに、Microsoft Windows から Oracle 9iFS にアクセスすることは可能です。このインストールでは、Microsoft Windows の標準構成には含まれないダイアログ・ボックスとメニューのみがいくつか追加されます。これらのユーティリティがない場合でも、ネットワーク・ドライブとして Oracle 9iFS にマップすることや、「ネットワーク コンピュータ」を使用して表示することができます。

Oracle 9iFS Windows ユーティリティのインストール・パッケージは、Oracle 9iFS サーバーの /ifs/clients/winui ディレクトリにロードされます。Windows クライアントからこのディレクトリにアクセスするには、SMB を使用してネットワーク・ドライブをマップするか、または「ネットワーク コンピュータ」を使用します。FTP を使用して、このディレクトリにアクセスすることもできます。

Oracle 9iFS Windows ユーティリティをインストールするには、次の手順を実行します。

1. 起動しているすべての Windows アプリケーションを保存および終了します。
2. /ifs/clients/winui/ ディレクトリの Setup.exe ファイルまで移動します。
3. Setup.exe をダブルクリックして実行するか、または「スタート」メニューの「ファイル名を指定して実行」コマンドから実行します。
4. 管理者から特に指示されていないかぎり、次の手順に従い、デフォルトを受け入れます。

デフォルトでは、Oracle 9iFS Windows ユーティリティは次のディレクトリにインストールされます。

C:\Program Files\Oracle\Oracle9iFS Utilities 9.0.1.0.0

次に示す 3 つの必須 Microsoft コンポーネントがシステムにインストールされていない場合は、これらがインストールされます。

- a. Windows Sockets Version 2 (WinSock2) : Windows 98 以降のすべての Windows プラットフォームでは、オペレーティング・システムとともに WinSock2 が事前にインストールされています。WinSock2 がインストールされていない Windows 95 クライアントには、Oracle 9iFS インストーラによりインストールされます。
 - b. Common Control 4.0 Upgrade: システムに Microsoft Common Control 4.0 がインストールされていない場合は、Oracle 9iFS インストーラによりアップグレード版がインストールされます。アップグレードするかどうかを確認するメッセージが表示された場合は、「はい」を選択します。
 - c. HTML Help 4.0: システムに Microsoft HTML Help 4.0 がインストールされていない場合は、Oracle 9iFS インストーラによりインストールされます。Oracle 9iFS Windows ユーティリティのヘルプを正常に使用できるようにするには、アップグレードするかどうかを確認するメッセージが表示されたときに「はい」を選択します。
5. Oracle 9iFS Windows ユーティリティのインストール後に、マシンを再起動する必要があります。

Oracle 9iFS Windows ユーティリティのインストールが完了すると、Windows エクスプローラの「ファイル」メニューおよびポップアップ・メニュー（右クリック・メニュー）に Oracle 9iFS の拡張機能用のメニューが表示されます。ポップアップ・メニューを表示するには、Oracle 9iFS ドライブ上のファイルまたはフォルダを右クリックします。

HTTP を介した Oracle 9iFS へのアクセス

HTTP を介して Oracle 9iFS にアクセスするには、次の URL を使用します。

`http://<server-name>:7777/ifs/files`

この URL は、次のようなアクセスの場合に必要です。

- Web ブラウザを介したアクセス
- Web フォルダなどの DAV アプリケーションを介したアクセス
- FileSync 機能を使用したサーバーへのアクセスまたは接続

Oracle 9iFS Portlet の Oracle Portal への登録

Oracle 9iFS Portlet は、ユーザーに対して各自の Oracle 9iFS データに関する情報の概要を提供するための Oracle Portal のコンポーネントです。ユーザーはポートレットを使用して、自分への割当ての表示、検索の開始、ドキュメントやフォルダの一覧表示およびドキュメントのアップロードを行うことができます。ポートレットは、Oracle 9iFS Web インタフェースにリンクしています。

Oracle Portal の管理者は、各自の Oracle Portal のインストールに Oracle 9iFS Portlet を追加できます。そのためには、Oracle Portal のホーム・ページで次のようにしてポートレットを Web プロバイダとして登録します。

1. Oracle Portal のホーム・ページで、「管理」タブをクリックします。
2. 「プロバイダ」ポートレットで、「ポートレット・プロバイダの追加」リンクをクリックします。
3. Web プロバイダを作成するためのフォームに、次のように入力します。

パラメータ	値
名前	9iFS
表示名	Oracle 9iFS
タイムアウト	100
タイムアウト・メッセージ	Oracle 9iFS Portlet がタイムアウトしました。
実装スタイル	Web
リモート・ノードに登録	いいえ
ログイン頻度	ユーザー・セッションごとに 1 回
URL	<code>http://<hostname>:<port>/ifs/portlet</code>

パラメータ	値
ポータルと同じ Cookie ドメインの Web プロバイダ	このチェックボックスをチェックしない

4. 「OK」をクリックします。

ポートレットを Oracle Portal のページに追加する方法の詳細は、Oracle Portal のマニュアルを参照してください。

図 5-1 Oracle 9iFS Portlet



Oracle 9iFS FileSync ユーティリティのインストール

FileSync ユーティリティによって、Oracle 9iFS の限定的な非接続クライアントを使用できるようになります。このユーティリティは、Windows クライアント PC にのみインストールできます。FileSync ユーティリティをインストールするには、Oracle 9iFS リポジトリの /ifs/clients/filesync ディレクトリに格納されている Setup.exe 自己インストール・ファイルを実行します。このファイルには、SMB、Web フォルダまたは Web インタフェースを使用してアクセスできます。次の手順を実行します。

1. /ifs/clients/filesync から Setup.exe ファイルを PC にダウンロードし、このファイルを実行すると、FileSync ユーティリティがローカル PC にインストールされます。
2. 「スタート」->「プログラム」を選択し、「Oracle 9iFS FileSync」プログラム・メニューを選択します。

FileSync の使用方法の詳細は、オンライン・ヘルプを参照してください。

注意： 場合によっては、競合解消の画面で「スキップ」オプションのみが使用可能になります。これは、FileSync では解決できない競合が発生していることを示します。たとえば、クライアントでファイルを改名したが、サーバー上でそのファイルの親フォルダが削除されているため、目的のファイルがすでに存在しない場合などです。他のファイルすべてを正常に同期するには、このファイルの同期を保留する必要があります。そのために、「スキップ」オプションのみが使用可能になります。

コマンドライン・クライアント・ユーティリティのインストール

Oracle 9iFS コマンドライン・クライアント・ユーティリティは、Oracle 9iFS がインストールされているマシン上で使用できます。また、Solaris クライアントや Windows クライアントにインストールすることもでき、ディレクトリを Oracle 9iFS サーバーからローカル・マシンのディレクトリにコピーしてインストールすることも可能です。

SMB を使用してネットワーク・ドライブをマップするか、またはローカル・マシンの「ネットワーク コンピュータ」を使用してこれらのディレクトリにアクセスできます。FTP を使用して、これらのディレクトリにアクセスすることも可能です。

注意： 個々のクライアント・マシンにコマンドライン・ユーティリティをインストールしない場合は、次の作業を実行する必要はありません。

Oracle 9iFS コマンドライン・ユーティリティをインストールするには、次の手順を実行します。

1. コマンドライン・ユーティリティをインストールするローカル・マシン上でディレクトリを決定し、そのディレクトリに移動します。
2. マップされたネットワーク・ドライブ (SMB) を使用して Oracle 9iFS サーバーの場所を特定するか、または FTP を使用して Oracle 9iFS に接続します。
3. Solaris クライアントにインストールする場合は、`/ifs/clients/cmdline/unix` ディレクトリに移動します。Windows クライアントにインストールする場合は、`/ifs/clients/cmdline/win32` ディレクトリに移動します。
4. このディレクトリの内容をローカル・ディレクトリにコピーします。
5. `ifscmdline.sh` ファイルまたは `ifscmdline.bat` ファイル内の次のパラメータを編集します。Windows クライアントを使用している場合は、ワードパッドを使用し、この形式で保存します。
 - `IFS_COOKIE_DIRECTORY`: コマンドライン・クライアント・ユーティリティのセッション情報は、`IfsCookie` ファイルに保持されます。このファイルは、ユーザーがログインするたびに生成されます。この変数で、このファイルのローカル・システムでの格納場所を指定します。この変数を設定しない場合、`IfsCookie` ファイルは現在の作業ディレクトリに保存されます。
 - `JRE_CMD`: SDK バイナリの場所。たとえば、`C:¥sdk1.2.2¥bin¥java` と指定します。
 - `IFS_CUP_SERVER`: この変数は、`Commandline Utility Protocol (CUP)` サーバーを実行するサーバーに設定します。たとえば、`ifstestmachine` と指定します。`Commandline Utility Protocol (CUP)` サーバーはローカル・マシンでは使用できないため、クライアント・マシンでコマンドライン・ユーティリティを実行する場合は必ずこの変数を設定する必要があります。
 - `IFS_CUP_PORT`: すべての Oracle 9iFS コマンドは、デフォルトのポート (4180) を使用して CUP サーバーにアクセスします。CUP サーバーが 4180 以外のポートで起動している場合は、この変数を該当するポート番号に設定する必要があります。たとえば、CUP サーバーがポート 4182 で起動している場合、この変数は 4182 に設定します。

コマンドライン・ユーティリティの詳細は、『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』を参照してください。

NFS クライアントの構成

ネットワーク・ファイル・システム (NFS) プロトコルは、ネットワーク上のクライアント・マシンとサーバー・マシン間でファイルを共有するために使用されます。NFS プロトコルは、複数の UNIX プラットフォームでのファイル共有に広く使用されている標準プロトコルです。NFS プロトコルは、主に UNIX プラットフォームで使用されますが、オペレーティ

ング・システムに依存しないように設計されているため、Windows など、その他のプラットフォームに実装することもできます。この項では、各種プラットフォームに NFS クライアントをインストールする方法を説明します。

Solaris 7 または 8

Oracle 9iFS NFS サーバーをそのホストのプライマリ NFS サーバーとして実行している場合は、標準の `mount` コマンドを使用して Oracle 9iFS をマウントできます。

構文:

```
mount <host>:<pathname> <mount_point>
```

例:

```
mount ifsserver:home /data/ifs
```

Oracle 9iFS NFS サーバーがそのホストのプライマリ NFS サーバーではない場合は、Oracle 9iFS NFS サーバーのポート番号を明示的に指定する必要があります。次に示す 2 つのコマンドのいずれかを使用して、セカンダリ iFS サーバーをマウントできます。

構文:

```
mount -o port=4049,public <host>:<pathname> <mount_point>
```

例:

```
mount -o port=4049,public ifsserver:home /data/ifs
```

構文:

```
mount nfs://<host>:4049/<pathname> <mount_point>
```

例:

```
mount nfs://ifsserver:4049/home /data/ifs
```

Red Hat Linux 6.2

Oracle 9iFS NFS サーバーをそのホストのプライマリ NFS サーバーとして実行している場合は、標準の `mount` コマンドを使用して Oracle 9iFS をマウントできます。

構文:

```
mount <host>:<pathname> <mount_point>
```

例:

```
mount ifsserver:home /data/ifs
```

Oracle 9iFS NFS サーバーがそのホストのプライマリ NFS サーバーではない場合は、Oracle 9iFS NFS サーバーおよび Oracle 9iFS MOUNT サーバーのポート番号を明示的に指定する必要があります。次のコマンドを使用して、セカンダリ Oracle 9iFS サーバーをマウントできます。

構文:

```
mount -o port=4049,mountport=4048 <host>:<pathname> <mount_point>
```

例:

```
mount -o port=4049,mountport=4048 ifsserver:home /data/ifs
```

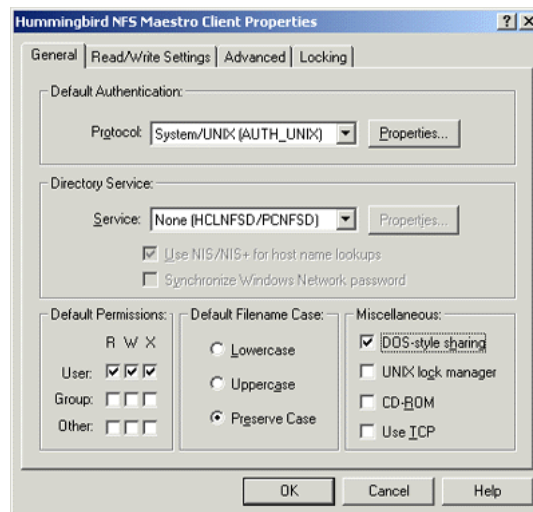
Hummingbird NFS Maestro 7.0

Hummingbird NFS Maestro Client を使用して Oracle 9iFS NFS サーバーにアクセスする前に、NFS Maestro Client が正しく構成されていることを確認する必要があります。

Hummingbird NFS Maestro の構成

1. 「コントロールパネル」から「ネットワーク」を選択します。
2. 「NFS Maestro Client」を選択し、そのプロパティを表示します。NFS Maestro Client のプロパティを設定する手順の詳細は、Windows 98、Windows NT または Windows 2000 のいずれかで設定を行うかによって異なります。次の図のような「Hummingbird NFS Maestro Client Properties」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 5-2 「Hummingbird NFS Maestro Client Properties」ダイアログ・ボックス



3. 「Default Authentication」を「System/UNIX」に設定します。これは、Oracle 9iFS NFS サーバーがサポートする唯一の認証方式です。
4. 「Default Filename Case」を「Preserve Case」に設定します。
5. 「Miscellaneous」の値を次のように設定します。
 - DOS-style sharing: 通常、NFS Maestro で DOS 形式のファイル共有をシミュレートすることを指定します。DOS 形式のファイル共有をサポートするには、NFS サーバー・マシンで HCLNFSD デーモンを実行する必要があります。NFS サーバー・マシンで HCLNFSD デーモンを実行しない場合、NFS サーバー上のファイ

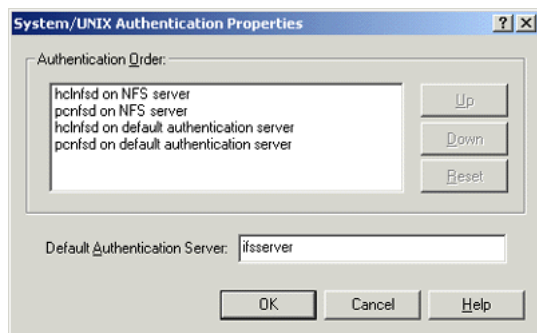
ルへのアクセスが遅くなります。このような場合は、「DOS-style sharing」ボックスのチェックを解除します。

- **UNIX lock manager:** Oracle 9iFS NFS サーバーには UNIX のロック・マネージャ (NLM) との互換性はありません。このボックスはチェックしないでください。
- **CD-ROM:** 共有ディレクトリが CD-ROM または読取り専用ファイル・システムである場合に使用します。このボックスはチェックしないでください。
- **Use TCP:** NFS サーバーに接続する際に UDP ではなく TCP を使用する場合に、このボックスをチェックします。

注意: TCP 接続は、常に標準 NFS ポート (2049) を使用します。Oracle 9iFS NFS サーバーを代替ポートで実行している場合は、このボックスをチェックしないでください。

6. 「Default Authentication」で「System/UNIX」を選択して「Properties」ボタンをクリックし、「Location of the Authentication Server」ダイアログ・ボックス (図 5-3 を参照) を表示します。

図 5-3 「Location of the Authentication Server」ダイアログ・ボックス



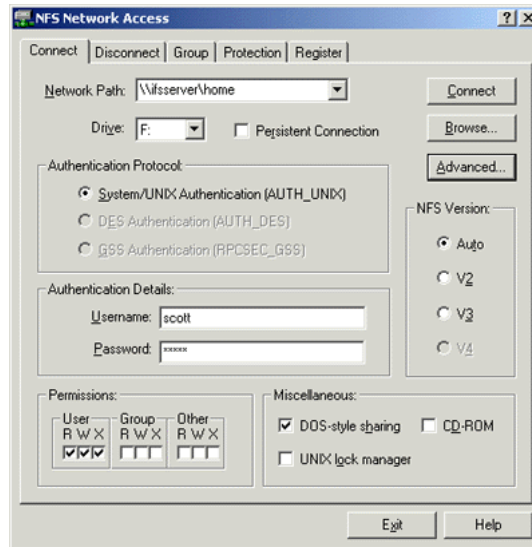
7. 認証サーバーの場所を入力して、「OK」をクリックします。NFS Maestro では、NFS サーバーにリンクする際に使用されるユーザー名とパスワードが有効な UNIX ユーザー名およびパスワードであることを確認するために認証サーバーを必要とします。

NFS Maestro は、まず NFS サーバー・マシン上の認証サーバーへのアクセスを試行します。認証サーバーが NFS サーバー・マシンで実行されていない場合、NFS Maestro はデフォルトの認証サーバーの使用を試行します。デフォルトの認証サーバーを指定する必要があるかどうかを判断するには、システム管理者に問い合せてください。

NFS Maestro Network Access Tool を使用した NFS ディレクトリへのリンク

1. 「NFS Maestro」フォルダから、NFS Network Access Tool を起動します。「NFS Network Access」ダイアログ・ボックスが表示されます (図 5-4 を参照)。

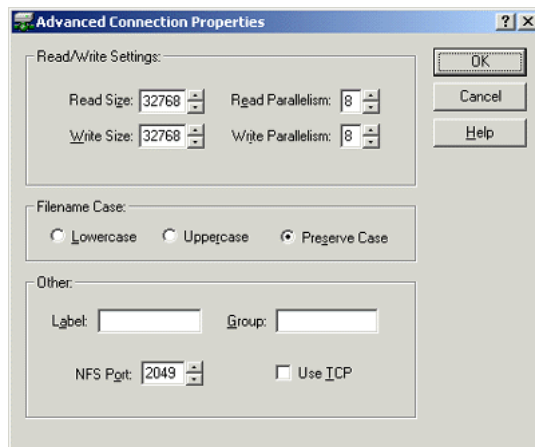
図 5-4 「NFS Network Access」ダイアログ・ボックス



2. 「Network Path」フィールドに、`\\<host>\<pathname>` の形式で Oracle 9iFS NFS サーバーのホスト名およびパス名を入力します。
3. 「Authentication Details」で、Oracle 9iFS NFS サーバーへのアクセスに使用する UNIX ユーザー名とパスワードを入力します。「Authentication Protocol」として「System/UNIX Authentication」を選択します。
4. 「Miscellaneous」の値を次のように設定します。
 - **DOS-style sharing:** 通常、NFS Maestro で DOS 形式のファイル共有をシミュレートすることを指定します。DOS 形式のファイル共有をサポートするには、NFS サーバー・マシンで HCLNFSD デーモンを実行する必要があります。NFS サーバー・マシンで HCLNFSD デーモンを実行しない場合、NFS サーバー上のファイルへのアクセスが遅くなります。このような場合は、「DOS-style sharing」ボックスのチェックを解除します。
 - **UNIX lock manager:** Oracle 9iFS NFS サーバーには UNIX のロック・マネージャ (NLM) との互換性はありません。このボックスはチェックしないでください。

- CD-ROM: 共有ディレクトリが CD-ROM または読取り専用ファイル・システムである場合に使用します。このボックスはチェックしないでください。
5. 「Advanced」 ボタンをクリックすると、「Advanced Connection Properties」 ダイアログ・ボックス (図 5-5 を参照) が表示されます。

図 5-5 「Advanced Connection Properties」 ダイアログ・ボックス



6. 「Filename Case」 として 「Preserve Case」 を選択します。
7. Oracle 9iFS NFS サーバーをセカンダリ NFS サーバーとして実行している場合は、NFS ポート番号を標準ポート番号 (2049) から Oracle 9iFS NFS サーバーが使用している代替ポート番号に変更します。
8. NFS サーバーへの接続に UDP 接続ではなく TCP 接続を使用する場合は、「Use TCP」 ボックスをチェックします。

注意: TCP 接続は、常に標準 NFS ポート (2049) を使用します。Oracle 9iFS NFS サーバーを代替ポートで実行している場合は、このボックスをチェックしないでください。

コマンドラインを使用した NFS ディレクトリへのリンク

Oracle 9iFS NFS サーバーをそのホストのプライマリ NFS サーバーとして実行している場合は、次に示す NFS Maestro の `nfs link` コマンドを使用して Oracle 9iFS をマウントできます。

構文:

```
nfs link <drive>: ¥¥<host>¥¥<pathname> <username>
```

例:

```
nfs link n: ¥¥ifssserver¥¥home scott
```

Oracle 9iFS NFS サーバーがそのホストのプライマリ NFS サーバーではない場合は、Oracle 9iFS NFS サーバーのポート番号を明示的に指定する必要があります。次のコマンドを使用して、セカンダリ Oracle 9iFS サーバーをマウントできます。

構文:

```
nfs link <drive>: ¥¥<host>¥¥<pathname> <username> /n:4049
```

例:

```
nfs link n: ¥¥ifssserver¥¥home scott /n:4049
```

その他のオプションの指定がない場合、`nfs link` コマンドでは NFS Maestro Client 用に構成されたデフォルト値が使用されます。NFS Maestro Client が Oracle 9iFS 用に構成されていない場合は、次のオプションを使用して、Oracle 9iFS NFS サーバー用に適切な値を設定できます。

- /L:s DOS 形式での共有を使用します。このオプションを指定する場合は、NFS サーバー・マシンで HCLNFSD デーモンを実行している必要があります。
- /L: ロックを使用しません。HCLNFSD デーモンが使用できない場合は、この値を使用します。
- /M:p ファイル名の大小文字を変換しません。
- /A:u System/UNIX 認証を使用します。
- /T UDP 接続のかわりに TCP 接続を使用します (オプション)。

注意: TCP 接続は、常に標準 NFS ポート (2049) を使用します。iFS NFS サーバーを代替ポートで実行している場合は、このオプションを使用しないでください。

トラブルシューティング

マウント時に「NFS サービスが応答しません。」とレポートされる

正しいホスト名とポート番号が指定されていること、および Oracle 9iFS NFS サーバーが実行されていることを確認してください。

マウント時に「アクセス権がありません。」とレポートされる

ホスト名とパス名が正しく指定されていることを確認してください。また、Oracle 9iFS NFS サーバーのポートが正しく指定されていることも確認します。Oracle 9iFS NFS サーバーが標準ポート番号で実行されていない場合は、Solaris では 'public' オプションを指定し、Linux ではマウント・ポートを指定する必要があります。

注意： 'public' オプションは、Solaris 2.6 ではサポートされていません。

NFS Maestro Client が停止したように見える

DOS 形式の共有を使用しているがサーバー・マシンで hclnfsd デーモンを実行していない場合、または UNIX のロック・マネージャを使用している場合には、NFS Maestro Client が停止したように見えたり、応答が極端に遅くなることがあります。「DOS-style sharing」および「UNIX lock manager」オプションのチェックを解除するか、またはコマンドラインで '/L:' を指定します。

コマンド・プロンプトで、'nfs use' コマンドを入力します。これにより、NFS Maestro で現在マップされているドライブおよびそのパラメータが一覧表示されます。ロック・パラメータが '/L:' であることを確認してください。

NFS Maestro で「Network Timeout or HCLNFSD/PCNFSD not running on Host」 とレポートされる

これは、NFS Maestro が認証サーバーに接続できなかったことを示します。hclnfsd デーモンが実行されているかどうかをシステム管理者に確認するか、またはデフォルトの認証サーバーが正しく指定されていることを確認します。また、「[NFS Maestro で「Bad Network Name」とレポートされる](#)」のトラブルシューティングの項を参照してください。

NFS Maestro で「Authorization Error」とレポートされる

ユーザー名とパスワードが正しく指定されていない可能性があります。認証サーバー上で有効な UNIX ユーザー名およびパスワードが指定されていることを確認してください。

NFS Maestro で「Bad Network Name」とレポートされる

ホスト名とパス名が正しく指定されていることを確認してください。これらが正しく指定されている場合は、NFS Maestro Rpcinfo tools を使用して、NFS サーバー（プログラム番号 100003）がホストで実行されていることを確認します。NFS サーバーがホストで実行されていることを Rpcinfo で確認できない場合は、システム管理者に問い合わせて、NFS サーバーが実行されているかどうかを確認してください。

NFS Maestro の 'nfs link' コマンドが停止する

正しいホスト名とポート番号が指定されていること、および Oracle 9iFS NFS サーバーが実行されていることを確認します。

NFS Maestro で「Access denied by server」とレポートされる

Oracle 9iFS NFS サーバーのポート番号が正しく指定されていることを確認します。

注意： TCP 接続は、常に標準 NFS ポート（2049）を使用します。Oracle 9iFS NFS サーバーを代替ポートで実行している場合は、このオプションを使用しないでください。

トラブルシューティング

この章では、インストールに共通する問題およびその解決方法を説明します。

- [インストール時の問題のトラブルシューティング](#)
- [Oracle Enterprise Manager の問題のトラブルシューティング](#)
- [オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問合せ](#)

インストール時の問題のトラブルシューティング

この項には、インストール時のエラーおよび問題の診断に役立つ情報が記載されています。
\$ORACLE_HOME/oraInventory/logs/installActions.log ファイルには、インストールの際に発生したエラーが記録されます。

\$ORACLE_HOME/9ifs/log/IfsConfigOut.log ファイルには、Oracle 9iFS を構成する際に発生したエラーが記録されます。

クラスパスの障害

Configuration Assistant の実行中に「Oracle 9iFS の CLASSPATH の検証に失敗しました」というメッセージを受け取った場合、Configuration Assistant が ORACLE_HOME を検索して、必要なライブラリを認識できなかったことを示しています。これらのライブラリが見つからない場合、Configuration Assistant は Oracle 9iFS の構成の続行を許可しません。

ojsp.jar ファイルおよび servlet.jar ファイルが見つからない場合、Oracle HTTP Server powered by Apache は Oracle 9iFS がインストールされた ORACLE_HOME に正しくインストールされていません。Oracle HTTP Server powered by Apache は、Oracle 9iFS の必須コンポーネントです。

translator.zip ファイルが見つからない場合、Oracle JVM は Oracle 9iFS がインストールされた ORACLE_HOME に正しくインストールされていません。translator.zip ファイルには、Oracle SQLJ ライブラリが格納されています。Oracle の loadjava ユーティリティはこのライブラリを必要とし、Oracle 9iFS は loadjava ユーティリティを必要とします。

この問題を解決するには、RDBMS を再インストールします。Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 または Oracle9i データベースを使用し、"標準" インストールを選択します。これにより、すべての必須コンポーネントがインストールされます。

インストール時の一般的なエラー

通常、インストール時のエラーのほとんどは、インストール前の処理の指示に厳密に従っていないことが原因で発生します。次の表に、インストール時の一般的なエラー、考えられる原因および対処方法を示します。

問題	考えられる原因	対処方法
データベース・オブジェクトの作成時のエラー	データベースを実行していないか、使用できない。または、リスナーを実行していない。	データベース・アクションの前に、データベースまたはリスナーを起動する。
データベース関連のインストール・エラー・メッセージ	データベースを実行していないときに、インストールを開始した。 Oracle Text が正しく構成されていない場合に、Oracle 9iFS を構成しようとした。	インストールの開始前にデータベースを起動する。および、tnsnames.ora ファイルと listener.ora ファイルの設定を確認する。
インストール時のアクセス権の問題	不適切なユーザーでインストールしようとした。	インストール時に書込みを行おうとしたファイル・システムのアクセス権を確認する。 目的のマシンに Oracle9i をインストールしたユーザーと同じユーザーで、Oracle 9iFS をインストールする。
データベース・リソースが不十分なために、Oracle 9iFS サーバーに障害が発生する	init<sid>.ora の値が小さすぎる。	\$ORACLE_HOME/9ifs/log ディレクトリで、障害が発生したサーバーのログ・ファイルを確認する。init<sid>.ora ファイルを編集して、以前より大きい値を指定する。
ログ・ファイル \$ORACLE_HOME/9ifs/log/Node.log に書き込まれるデータベース・カーソルが不足する	init<sid>.ora 内の open_cursors の値が小さすぎる。	init<sid>.ora ファイルを編集して、open_cursors に以前より大きい値を指定する。
サーバーが遅い	チューニングを行う必要がある。	『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』の第9章「Oracle 9iFS トラブルシューティングとパフォーマンス情報」を参照。

問題	考えられる原因	対処方法
<p>「Oracle Text 構成を検証しています。」フェーズの際に Oracle 9iFS Configuration Assistant が停止する</p>	<p>ctxhx の構成に誤りがある。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. top または ps コマンドを使用してオペレーティング・システムのプロセスを確認し、ctxhx が CPU の 80% 以上を使用しており、1 分以内に完了しないことを検証する。 2. ctxhx プロセスを中断する。 3. Oracle 9iFS Configuration Assistant を再実行する。 4. これで問題が解決しない場合は、次の 2 つのコマンドを発行して、Oracle 9iFS Configuration Assistant とは別に ctxhx をテストする。 <pre>cd \$ORACLE_HOME/ctx/bin ctxhx \$ORACLE_HOME/adm/sql/ifsctxtest.doc test.html</pre> 5. Oracle 9iFS Configuration Assistant とは別に VerifyContext をテストする。 <ul style="list-style-type: none"> ■ BLOB 列を持つ一時表を作成する。 ■ この BLOB 列に Oracle Text 索引を作成する。 ■ BLOB 列に単純な Microsoft Word ドキュメントを格納する。 ■ Oracle Text 索引を同期化する。 ■ ドキュメントの内容に対して問合せを発行する。 <p>次の 2 つのコマンドを発行して、VerifyContext をテストする。</p> <pre>cd \$ORACLE_HOME/9ifs/bin . ifsenv.sh \$IFS_JRE -classpath \$IFS_BASE_CLASSPATH oracle.ifs.tools.VerifyContext sys change_on_install \$ORACLE_HOME/9ifs/admin/sql/ifsctxtest.doc</pre> <p>(データベースが別のマシンにある場合は、オプションとして次のような JDBC 接続文字列を追加する。</p> <pre>jdbc:oracle:oci8:@myTNSalias)</pre> 6. VerifyContext の出力を確認して、エラーの原因を特定する。

Oracle Enterprise Manager の問題のトラブルシューティング

問題	考えられる原因	対処方法
Oracle Enterprise Manager コンソールで Oracle 9iFS ターゲット (Oracle 9iFS ドメイン・コントローラおよび Oracle 9iFS ノード) を検出できない	これらの Oracle 9iFS ターゲットのホストで Oracle Intelligent Agent を実行していない、または Oracle Intelligent Agent がターゲットを検出できない。Oracle Enterprise Manager でこれらのホストのリフレッシュを行っていない。	<p>Oracle 9iFS Configuration Assistant を実行する前に、インストールの前処理作業の一部として、<code>\$ORACLE_HOME/bin/emca</code> で Oracle Enterprise Manager のリポジトリを構成する。第 2 章「インストール前の処理」の「作業 7: Oracle Enterprise Manager の設定」を参照。</p> <p>Oracle 9iFS Configuration Assistant を実行した後、インストールの後処理作業として、次の手順を実行する。</p> <ol style="list-style-type: none"> Oracle 9iFS ドメインのすべてのホストで、Oracle Intelligent Agent を起動 / 再起動する (IA を起動 / 再起動するときに、環境変数として <code>ORACLE_SID</code> を定義する必要がある)。 <pre>agentctl stop agentctl start</pre> これを、"<code>echo \$ORACLE_SID</code>" で確認する。 IA が Oracle 9iFS ターゲットを検出したかどうかを確認する。<code>\$ORACLE_HOME/network/agent/services.ora</code> を確認する。そのホストに Oracle 9iFS ドメイン・コントローラを構成した場合は Oracle 9iFS ドメイン・コントローラのエン트리、およびそのノードで構成したすべての Oracle 9iFS ノード (HttpNode を除く) のエントリを検索する。<code>services.ora</code> ファイルに、<code>oracle_sysman_ifs</code> および <code>oracle_sysman_ifs_node</code> のエントリがあることを確認する。 次のファイルが存在することを確認する。 <pre>\$ORACLE_HOME/network/agent/config/ifs.ora \$ORACLE_HOME/network/agent/config/ifs.tcl \$ORACLE_ HOME/sysman/config/OEMClient.properties</pre> に <code>ifs</code> のエントリがあるかどうかを確認する。これらが見つからない場合は、Oracle データベースをインストールしたユーザー (通常は、<code>'oracle'</code>) で、<code>ifsoemsetup</code> スクリプトを実行する。 <p>Oracle データベースをインストールしたユーザーで、<code>\$ORACLE_HOME/9ifs/bin/ifsoemappsetup</code> の実行も試行可能。</p> Oracle Enterprise Manager コンソールを開く。 <pre>oemapp console</pre> 検出ウィザードを使用して Oracle 9iFS ドメインのすべてのホストを検出するか、またはリフレッシュする。

問題	考えられる原因	対処方法
Oracle 9iFS ノードの Oracle 9iFS ドメイン・コントローラでジョブまたはイベントが動作しない	OMS を実行するマシンで ifsomsssetup を実行していない。または、スクリプトの実行後に OMS を停止または再起動した。	OMS を実行するマシンで、次の手順を実行する。 <ol style="list-style-type: none"> 1. OMS が実行中の場合は、これを停止する。 2. Oracle データベースをインストールしたユーザー（通常は、'oracle'）で、ifsomsssetup スクリプトを実行する。 3. OMS を再起動する。

オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問合せ

オラクル社カスタマ・サポート・センターに問い合わせる前に、次の事項を確認してください。

- 使用しているソフトウェア、データベースおよび環境の構成が、[第2章「インストール前の処理」](#)に記載されている構成に一致していることを確認します。
- CSI 番号（該当する場合）または詳しい連絡先情報（特別なプロジェクト情報、Oracle 9iFS とその関連製品の完全なリリース番号、オペレーティング・システム名とそのバージョン番号など）を確認します。
- エラー・コード番号および次の事項を含む、問題の詳細な内容をメモにまとめます。
 - 発生したエラーまたは実行されなかった処理の内容
たとえば、使用したコマンドとそれによって得られた結果などです。
 - エラーが発生したタイミング
たとえば、システム負荷のピーク時、特定のコマンドの実行後、またはオペレーティング・システムのアップグレード後などです。
 - エラーが発生した場所
たとえば、データベース・マシン上または Oracle 9iFS マシン上などです。
 - 問題の影響が及ぶ範囲
たとえば、本番システムが使用不能になった、大きな影響はないが処理が遅くなった、またはほとんど影響がなく安定している、などです。

問題の発生時またはその直後に記録されたインストール・ログ、Oracle 9iFS ログ、Oracle Text ログ、トレース・ファイル、コア・ダンプおよび REDO ログ・ファイルをコピーします。オラクル社カスタマ・サポート・センターでは、問題を詳細に検討するためにこれらの情報が必要になる場合があります。

インストールに関連する問題では、この他に次の情報も必要になります。

- \$ORACLE_HOME およびステージング領域の内容のリスト（使用した場合）
- \$ORACLE_HOME/9ifs/log ディレクトリのすべてのログ・ファイル

オラクル社カスタマ・サポート・センターの連絡先は、次の URL から参照できます。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

索引

数字

2 層構造, 2-2, 2-4
3 層構造, 2-4, 2-5
9iFS
 インストール, 3-1
 起動, 4-3, 4-4
9iFS ターゲットの検出, 6-4

D

DAV サーバー, 3-10
DBA アカウント, 2-10
DBA 権限, 2-10

E

EMCA, 2-9
Enterprise Manager コンソール, 1-10

F

FileSync ユーティリティ, 5-5
 インストール, 5-5
FTP サーバー, 1-4

H

HTTP Server, 1-5, 4-2, 4-4
HTTP ノード, 1-5, 3-10
 変更, 4-2

I

ifsConfigOut.log, 6-1
ifsconfig スクリプト, 3-2
ifsemalsetup スクリプト, 4-1
ifsenv.sh ファイル, 4-13
ifsJservctl スクリプト, 4-5

ifslaunchedc スクリプト, 4-4
ifslaunchnode スクリプト, 4-4
ifsomssetup スクリプト, 2-10
ifsprops.properties ファイル, 4-13
ifssetup スクリプト, 3-15
ifsstartdomain スクリプト, 4-4
ifsstopdomain スクリプト, 4-4
Intelligent Agent, 1-11
 起動, 4-2
 再起動, 4-2
 実行していない, 6-4
Intelligent Agent の再起動, 4-2

J

Java Virtual Machine インタプリタ
 変更, 4-13
Java VM, 1-5
JRE
 1.3.0 の構成, 4-13
 サポートされている構成
 JRE, 4-13
Jserv プロセス, 4-4
 起動, 4-5
 停止, 4-5

L

LOB データ, 3-8

O

OMS, 2-4
 ステータスのチェック, 4-3
 停止, 4-3
OMS 管理者
 パスワード, 4-3
Oracle 9iFS
 ソフトウェアのインストール, 3-1, 3-3

停止, 4-4
Oracle 9iFS Configuration Assistant, 2-2, 3-2
Oracle 9iFS FileSync ユーティリティ, 5-5
Oracle 9iFS Portlet, 4-6, 5-3
Oracle 9iFS Windows ユーティリティ, 5-1
インストール, 5-1, 5-2
Oracle 9iFS コマンドライン・クライアント・ユーティ
リティ, 5-5
インストール, 5-5
Oracle 9iFS のインストール, 2-1
Oracle 9iFS の再構成, 3-2
Oracle Enterprise Manager, 1-10
設定, 2-1, 2-9
Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant,
2-9, 2-10
Oracle Enterprise Manager イベント, 1-11
Oracle Enterprise Manager クライアント, 2-4
Oracle Enterprise Manager コンソール, 1-10, 4-2
Oracle HTTP Server, 1-5, 2-6, 4-2, 4-4
再起動, 4-2
Oracle Intelligent Agent, 1-11
Oracle JDBC/OCI Driver for Java 1.1 および 1.2, 2-4
Oracle JVM, 2-4, 2-5
Oracle Management Server, 2-4
起動, 4-3
Oracle Net8 Assistant, 2-7
Oracle Partitioning, 2-4, 2-5
Oracle Text, 2-4, 2-5
Oracle Universal Installer, 2-2, 3-2
実行, 3-1
終了, 3-15
Oracle9i, 2-4
マニュアル・セット, vi
Oracle9i interMedia メディアの表領域, 3-8
Oracle9i Text キー・マップの表領域, 3-8
Oracle9i Text 索引の表領域, 3-8
Oracle9i Text データ, 3-8
Oracle9i Text データの表領域, 3-9
Oracle9i クライアント, 2-5
Oracle9i データ, 3-8
Oracle9i データベース, 2-1
Oracle 初期化パラメータ, 2-7

S

SDK
サポートされているバージョン, 4-13

Solaris
環境, 2-1, 2-8
パッチ, 2-4, 2-5
SQL*Plus, 2-4
データベースを停止するために使用, 2-8
SYS のパスワード, 3-4

T

TCP/IP サーバー・ソケット, 1-4
TNS サービス名, 2-7, 3-3, 3-4

U

Uniform Resource Locator, 1-4
URL, 1-4
UTF8 キャラクタ・セット, 3-13

W

Web インタフェース
管理機能, 1-13
Windows
9iFS クライアント・ユーティリティのインストー
ル, 5-1
Windows インタフェース, 5-1
Windows クライアント・ユーティリティ, 5-1

X

XML
構成ファイル, 1-15

あ

アクセス権の問題, 6-2

い

インストール
9iFS ソフトウェア, 3-1, 3-3
エラー, 6-2
クライアント・パッケージ, 5-1
ディレクトリ, 3-1
標準, 2-7
問題, 6-1, 6-2
インストール後の処理, 4-1

- Oracle 9iFS の起動, 4-3, 4-4
- Oracle 9iFS の停止, 4-4
- インストールの概要, 2-1
- インストール前の作業, 2-1, 2-3
- インストール前の処理
 - Oracle9i データベースのインストールまたはアップグレード, 2-4
 - インストールに必要なプロセス, 2-8
 - 作業, 2-3
 - 使用可能なハード・ディスク領域の確認, 2-3
 - データベース・パラメータの設定, 2-7
 - データベース・マシンの構成, 2-7
- インストール・ログ・ファイル, 2-4

え

- エージェント, 1-6
 - ガベージ・コレクション・エージェント, 1-4
- エラー
 - インストール, 6-1, 6-2

お

- オブジェクト・データ, 3-8
- オラクル社カスタマ・サポート・センター, 6-5
- 問合せ, 6-5

か

- 開発環境, 2-2
- 概要
 - インストール, 2-1
- 確認
 - ハード・ディスク領域, 2-3
- カスタム表領域, 3-6, 3-7
- ガベージ・コレクション・エージェント, 1-4
- 環境
 - Solaris, 2-1, 2-8
 - 開発, 2-2
 - 本番, 2-2
 - ランタイム環境の変更, 4-13
- 環境変数
 - LD_LIBRARY_PATH, 2-7
 - ORACLE_SID, 2-7
 - PATH, 2-7
 - 確認, 2-7
- 完全構成, 3-2

- 管理クライアント構成, 3-2
- 管理ツール
 - Web インタフェース, 1-13
 - XML 構成ファイル, 1-15
 - コマンドライン・ユーティリティ, 1-14

き

- 記憶域
 - 表領域, 3-8
- 起動
 - データベース, 2-8
 - プロセス, 2-8
- キャラクタ・セット, 1-5, 3-13
 - デフォルト, 3-13

く

- クライアント
 - Oracle Enterprise Manager, 2-4
 - Oracle9i, 2-5
 - インストール, 5-1
- クラスパスの障害, 6-1
- グループ
 - 作成, 1-13
- グループ情報, 3-8

け

- 権限
 - DBA, 2-10
- 言語
 - デフォルト, 1-5
- 検索機能, 2-4, 2-5
- 検証
 - データベース接続, 3-4

こ

- 構成
 - Solaris 環境, 2-8
 - 完全, 3-2
 - 管理クライアント, 3-2
 - サーバー, 1-5, 1-6
 - サービス, 1-5
 - データベース, 2-7
 - ノード, 1-5, 1-7

- 構成タイプ
 - 選択, 3-2
- 構成パラメータ
 - 9iFS, 3-2
- 構成ファイル
 - XML, 1-15
- 構成プロセス・ログ, 3-2
- 構成プロパティ
 - サービス, 1-8
 - ノード, 1-8
- 構造
 - 2層, 2-2, 2-4
 - 3層, 2-5
- コマンド構文, vii
- コマンドライン, 1-14
 - ドメインを起動, 4-3
 - ドメインを停止, 4-3
- コマンドライン・ユーティリティ, 1-14
- コンテンツ管理機能, 5-1

さ

- サーバー
 - DAV, 3-10
 - FTP, 1-4
 - HTTP, 4-2, 4-4
 - アクティブ, 1-9
 - アクティブでない, 1-9
 - エージェント, 1-4
 - 自動的に起動, 1-9
 - 障害, 6-2
 - 電子メール, 4-1
 - プロトコル, 1-4
 - ロード, 1-9
- サーバー構成, 1-5, 1-6
- サーバー・マシン
 - インストールするもの, 2-5
- サービス構成, 1-5
 - パラメータ, 1-5
- サービス名
 - TNS, 2-7, 3-3, 3-4
 - ローカル, 2-7
- サブレット
 - Jserv で実行, 4-4
- 索引, 3-8
- 索引付けされたメディアの表領域, 3-8
- 索引付けされていないメディアの表領域, 3-8

索引付けする言語, 3-13

し

- 実装方針, 2-1
- 修正ジョブ, 1-11
- 障害からのリカバリ, 1-4
- 障害検出, 1-11
- 情報
 - グループ, 3-8
 - ユーザー, 3-8

す

- スキーマ
 - 既存のスキーマの使用, 3-5
 - 新規のスキーマの作成, 3-5
 - 名前付け, 3-6
 - パスワード, 4-3
- スキーマのパスワード, 3-6
- スキーマ名, 1-1, 1-5
- スクリプト
 - ifsemalsetup, 4-1
 - ifsJservctl, 4-5
 - ifslaunchdc, 4-4
 - ifslaunchnode, 4-4
 - ifsomssetup, 2-10
 - ifsstartdomain, 4-4
 - ifsstopdomain, 4-4
 - 実行, 1-14

せ

- セッション
 - 最大数, 1-5
- 接続プール
 - データベース, 1-5
- 全体バックアップ, 2-3

た

対象読者, v

ち

- チェックイン / チェックアウト, 5-1
- 中間層プロセス, 1-1

て

ディレクトリ

9iFS のインストール, 3-1

データ

LOB, 3-8

Oracle9i, 3-8

Oracle9i Text, 3-8

オブジェクト, 3-8

テキスト, 3-9

メディア, 3-8

データベース

Oracle 9iFS 用に構成, 2-7

SQL*Plus を使用して停止, 2-8

起動, 2-8

キャラクタ・セット, 3-13

実行していない, 6-2

接続, 2-7

バックアップ, 2-1, 2-3

パラメータの設定, 2-7

データベース・カーソル, 6-2

データベース接続, 3-4

データベース接続プール, 1-5

データベースへの接続, 2-7

テキスト・データ, 3-9

デフォルト

キャラクタ・セット, 1-5, 3-13

言語, 1-5

サーバー, 1-9

デフォルト資格証明

資格証明

デフォルト, 4-3

デフォルトの表領域設定, 3-6

電子メール・サーバー, 4-1

テンプレート, 1-5, 1-6

と

読者

対象, v

ドメイン

9iFS の管理, 3-3

監視, 1-10

管理, 1-10

起動, 4-4

検出, 1-11

コマンドラインから起動, 4-3

コマンドラインから停止, 4-3

停止, 4-4

ドメイン・コントローラ, 1-2, 1-4, 1-7, 3-10, 4-4

起動, 4-4

構成設定の変更, 4-2

トラブルシューティング

インストールの問題, 6-1

オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問合せ, 6-5

一般的なエラー, 6-2

ね

ネットワーク・インタフェース, 3-9

ネットワーク・ドライブ

マップ, 5-2, 5-6

の

ノード, 1-9

HTTP, 1-5, 3-10, 4-2

監視, 1-2

起動, 4-4

サーバー, 1-3

サービス, 1-3

デフォルトのサーバー, 1-9

汎用, 1-5, 1-6

非保護, 1-4

ロケータ, 1-7

保護, 1-4

ノード・ガーディアン, 1-4, 1-11

ノード構成, 1-5, 1-7

アクティブ, 1-7

は

ハードウェア構成, 2-2

最小, 2-2

推奨, 2-2

ハードウェア要件

最小, 2-2

ハード・ディスク領域

確認, 2-3

パスワード

OMS 管理者, 4-3

SYS, 3-4

スキーマ, 3-6, 4-3

バックアップ

既存のデータベース, 2-1, 2-3

全体, 2-3

ログ・ファイル, 2-4

バッチ, 2-6

Solaris, 2-4, 2-5

パラメータ

9iFS の構成, 3-2

サーバー構成, 1-6

サービス構成, 1-5

初期化, 2-7

データベースの設定, 2-7

バルク・ロード, 1-15

汎用ノード, 1-5, 1-6

ひ

非 Unicode 対応プロトコル・サーバー, 3-13

非保護ノード, 1-4

表

小さく分割, 2-5

表記規則

表記法, vii

表記法

表記規則, vii

表記法規約, vii

表領域, 2-10, 3-7

Oracle9i interMedia メディア, 3-8

Oracle9i Text キー・マップ, 3-8

Oracle9i Text 索引, 3-8

Oracle9i Text データ, 3-9

カスタマイズの前に作成, 3-7

カスタム, 3-6, 3-7

記憶域, 3-8

索引付けされたメディア, 3-8

索引付けされていないメディア, 3-8

デフォルト設定の使用, 3-6

プライマリ, 3-8

ふ

物理構成, 1-2

プライマリ表領域, 3-8

プログレス・バー, 3-1

プロセス

起動, 2-8

プロトコル

WebDAV, 1-5

プロトコル・サーバー, 1-4, 1-6, 2-2

実行, 2-2

ほ

方針

実装, 2-1

ポート

デフォルトの番号, 3-11

デフォルトの変更, 3-11

ポート番号, 1-4

保護ノード, 1-4

ホスト

再検出, 4-2

ホストの再検出, 4-2

本番環境, 2-2

ま

マウント・サーバー・ポイント, 3-11

マップされたネットワーク・ドライブ, 5-2, 5-6

マニユアル・セット

Oracle 9iFS, vi

Oracle9i, vi

め

メタデータ, 3-8

メディア・データ, 3-8

も

問題

アクセス権, 6-2

インストール, 6-1, 6-2

トラブルシューティング, 6-1

ゆ

ユーザー

作成, 1-13

ユーザー情報, 3-8

ユーティリティ

Oracle 9iFS Windows, 5-1

Oracle 9iFS コマンドライン・クライアント, 5-5

よ

要件

ハードウェア, 2-2

り

リスナー

実行していない, 6-2

リポジトリ

スキーマ名, 1-5

領域

ハード・ディスクの確認, 2-3

ろ

ローカル・サービス名, 2-7

ログ・ファイル, 2-4

9iFS 構成プロセス, 3-2

ifsConfigOut.log, 6-1

インストール, 2-4

バックアップ, 2-4

ロケータ, 1-4

ノード, 1-7

論理構成, 1-2

わ

割当て

ポートレットに表示, 4-6, 5-3

